景風

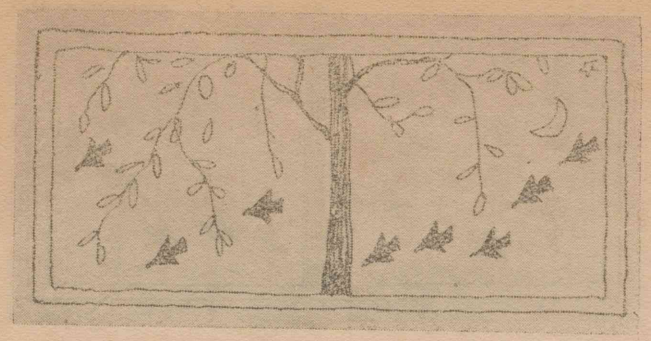
創刊號

Y32
Z45

K915.02
Y32
Z45

表紙畫……南薰造
扉畫……小山周次
夕暮……（一）……三木露風
ダ・ヰンチの言葉……（四）……片上伸
風激しく……（九）……前田夕暮
終日……（一三）……室生犀星
もぐらの神樣……（一七）……白鳥省吾
結ぼれ……（二二）……西宮藤朝
鏡……（二七）……門間春雄
鳩……（三二）……太田宗篤
あけぼの……（三三）……鈴木末造
あはゆき……（三五）……唐澤章
パッカス神に……（三八）……山内久太郎
蟲……（四〇）……薄井暮光
哀話……（四二）……櫻井朱春
小曲……（四四）……青柳花明
砂上……（四七）……平井牧村

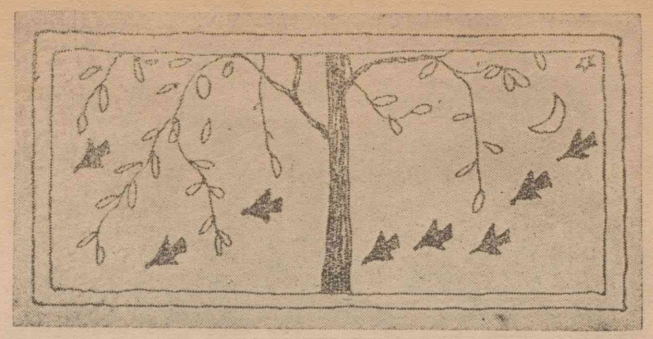
かなしみ……永田滿穗
光……福武鶴二（五〇）
賦……川崎潭明（五二）
猫の瞳……鈴木鐸郎（五四）
寶玉集……池上修等（五五）
マダム・ギオン……山村暮鳥（五七）
肉體の合奏の進行曲……山村暮鳥（七三）
消息……山村暮鳥（八四）



夕暮

三木露風

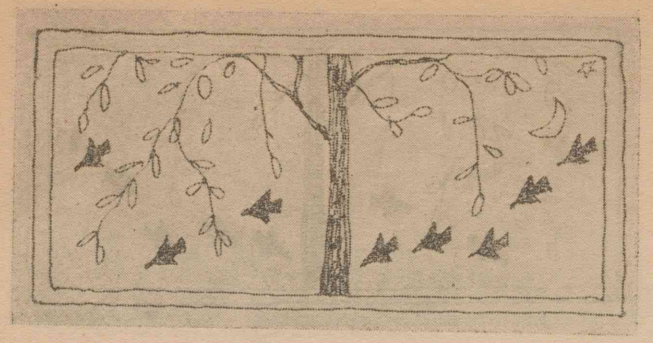
やはらかき水の流れに
溶けてうつる、夕の聖き赤
りの陰に織りこまるひらめき
空と地との、波うてる二つの衿。
衿の色緑に



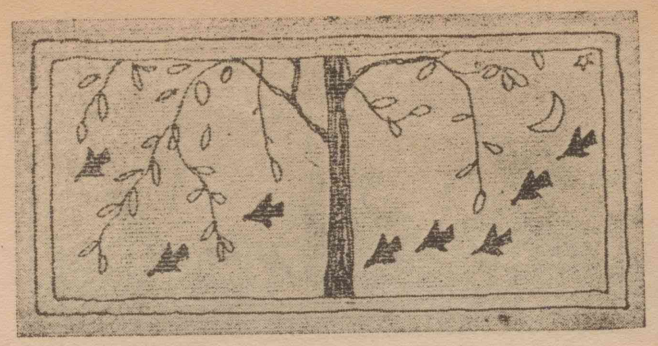
ゆるきうねりとなる野
やゝ暗くしめりたれど空は
稲妻の中に默せし聖者の眼。

耕やす車、小さく失せぬ
さてまた黒き低音の獸ら
せはしき息の中に混じ合ひぬ
雜鬧するにほひの夢に。

かけりゆく色はたゞ二つ
つらなる雲を出でて見ゆ、



夜きたりて、地はみづから
漂ふひびきとなり合せつつ。

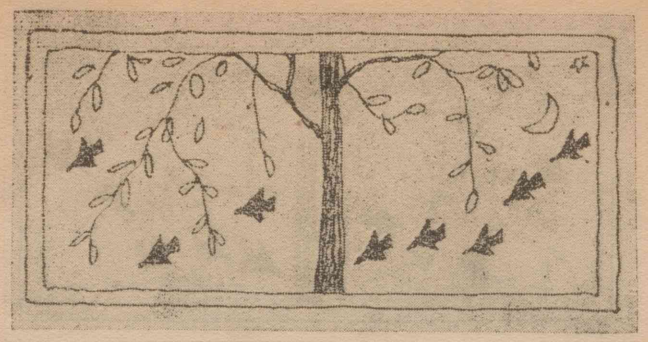


ダ・ヰンチの言葉

片上伸

どうか私を嘲つてくれるな！　私は貧しくはないのだ！　多くのものを欲する人こそ寧ろ貧しいのだ。

よく費した一日が幸福な眠りを齎らすやうに、よく用ひられた一生は幸福な死を齎らす。



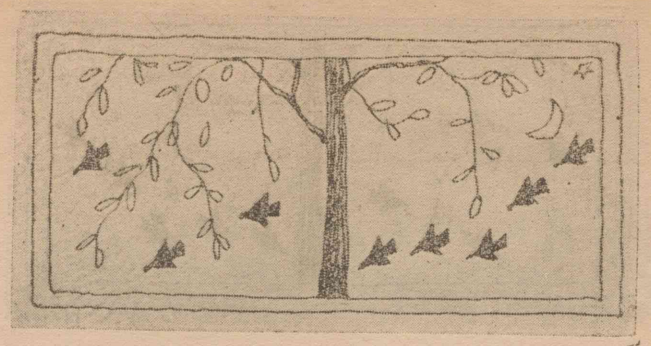
私は自分で如何にして生くべきかを學んでゐると思つてゐた間に、私は如何にして死すべきかを學んで居つたのだ。

よく費された一生は長い。

川の中で、人の觸れる水は、過ぎて行つた水の最後のもので、流れて來る水の最初のものである。時もまれと同じだ。

薪はまれを燃やすところの火を養ふ。

まれの師を乘り越えない弟子はつまらない弟



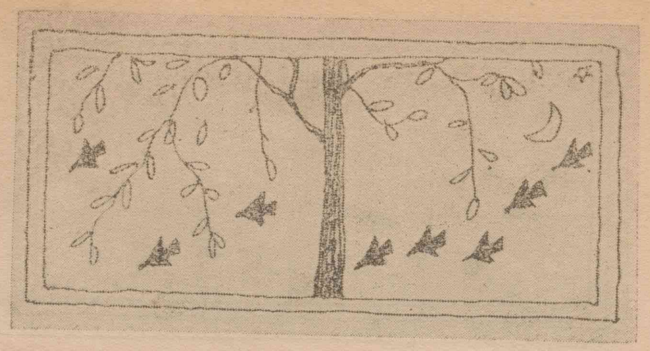
子である。

學問は將帥である。實行は兵卒である。

どの部分も全体と結び附かうといふ氣である。それによつて自分の不完全から免かれられるように。

自然は決して自分の法則を破らない。

自分の正しく理解しないものを褒めるのは惡い。しかしそれを惡く言ふのは尙惡い。

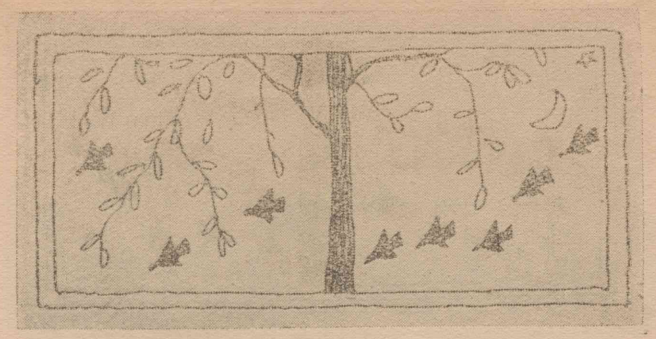


價値のない人間のことをよく言ふのは、善い人間のことを惡く言ふやうなものだ。

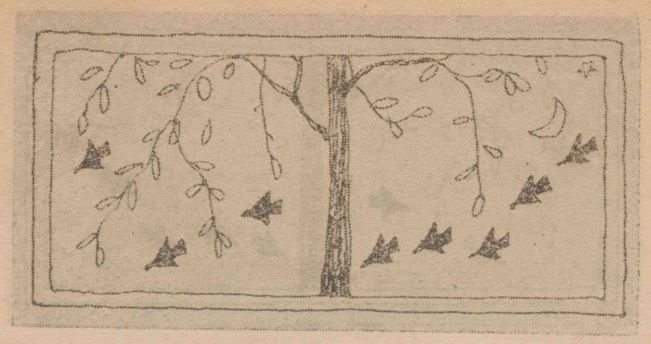
人生を價値ありとしないものは、生きるに値ひしない。

惡を罰することを懈るものは、惡をなすことを許すものである。

人間は物言ふ大いなる力を有つてゐる。しかしその大部分は空虛で僞りである。動物は僅かしか有つてゐない。しかもその僅かは有用で眞實である。大なる僞りよりは少しの確



かなものの方がよい。

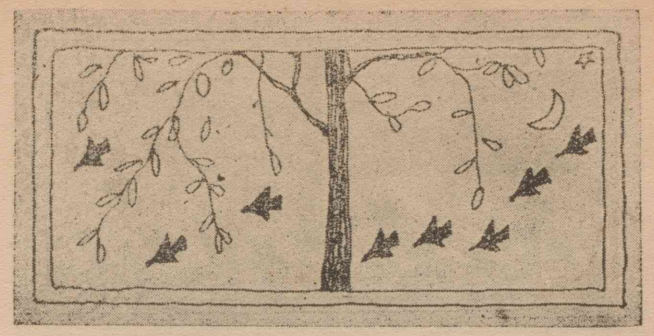


風激しく

前田夕暮

風激しく小砂まじりの煤烟をわが顔にひたと
吹きうりぎけり

風激しく驛標をゆりて吹けりけりさと煤烟の
渦巻きすぐる



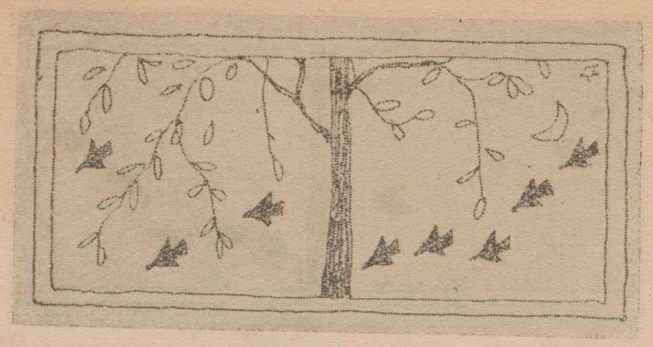
風激しく我が頰をふきつ煤烟は我が眼に入りて針さす如し

しくしくと我が眼痛みてひらかれず涙ながしつわが歩みたり

わが病める妻の枕べほつねんと坐りてあればわが眼は暗し

白粥をたうべんとしてわが妻はおきいでにけり夕くらがりに

×

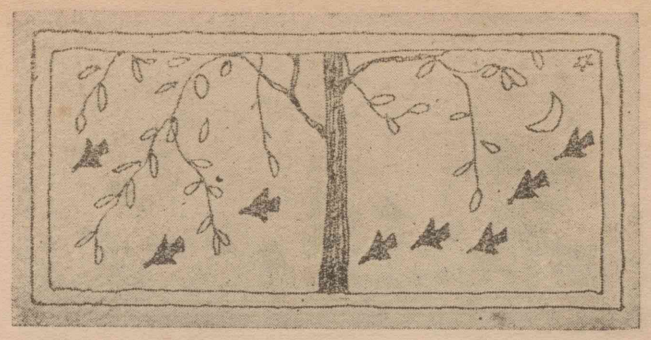


野のなかの一もと木蓮花ひらく前の木蓮幹光りたり

木蓮は地上に搖れてゐたりけり少年數人樹にのぼりたる

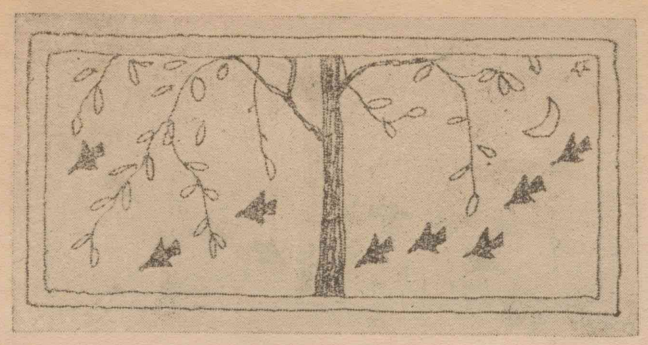
苔青くふくらみし樹に少年がよぢて青枝ほきと手折るも

われ野に大聲あげてわらひけり夕日は太き烟突の彼方に



かけふちの不義者が二人野にねし野木の下か
げ草青みたり

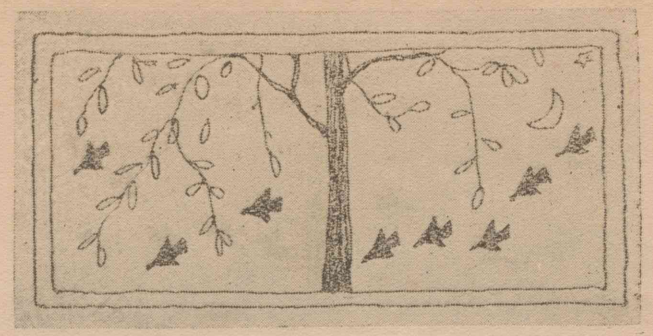
青枝のしなやかさもてわがからだひしひしと
うてり日にさらしつつ



終日

室生犀星

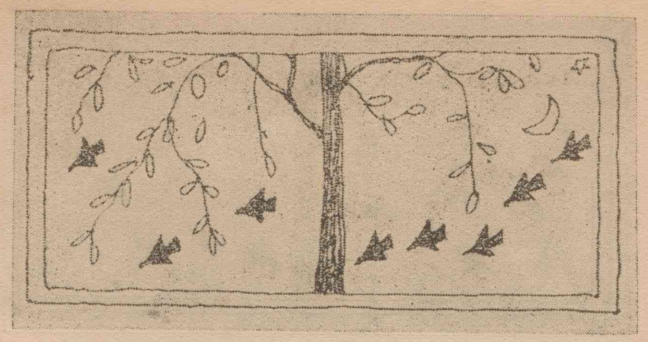
いよいよ魚はあをくなり
いよいよ魚はするどかり。
われ、かなしみてものを食まず。
魚かなしみて陰をいでず。
いよいよあをき世界となり
われものをはまず終日は



みやこの街をさまよひぬ。
いよいよ魚はあをくなる。

春の寺

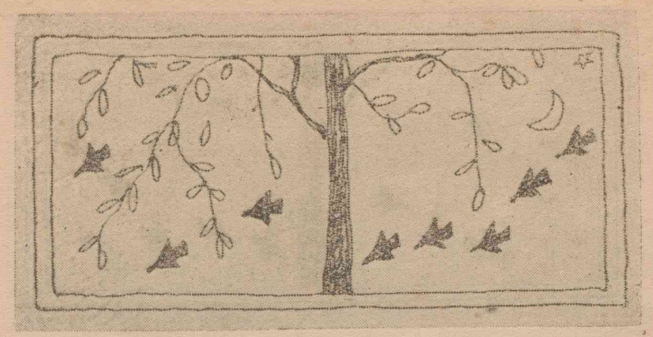
うつくしきみ寺なり
み寺にさくら、れうらんたれば
うぐひすしたたり
さくら樹にすずめら交りて
かんかんと鐘鳴りてすずろなり。
かんかんと鐘鳴りてすずろなれば
おとめらひろかに



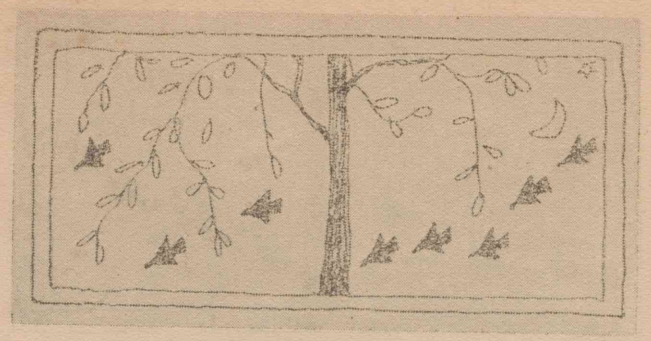
ちちははのなすべきことをしてあるぶなり。
寺塔くれなゐ、にんにんと
うつくしき春のみ寺なり。

霞

ふくらみて青める山
ひかりさびしき明眸の
山にもひろみ、こがれ、こがれわたるか。
あかき霞を着け
なにのうれしさなるぞ
野はとんぼがへりす。



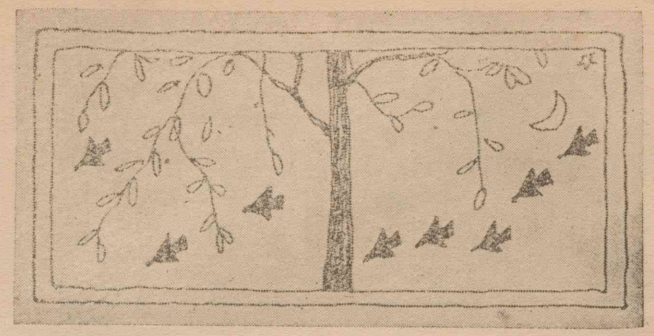
らんらんと陽氣はことにさかんなれば
菜種の畑はかんじ極まり
河の上に
流れうりがむとせるにあらずや。
とけてながれよな種の畑
ゆめにはあらず
樹はみな鳴りてはあゆむ。
ひかりさびしき明眸の
山にもひろみ、こがれ、こがれわたるか。



もぐらの神様

白鳥省吾

幾千里はてしも知らぬ薄明りもぐらは嘆くさ
んたまりあと
しみじみと萌ゆる草根にゆきあたり蒼空の匂
ひ深く嗅ぎたれ



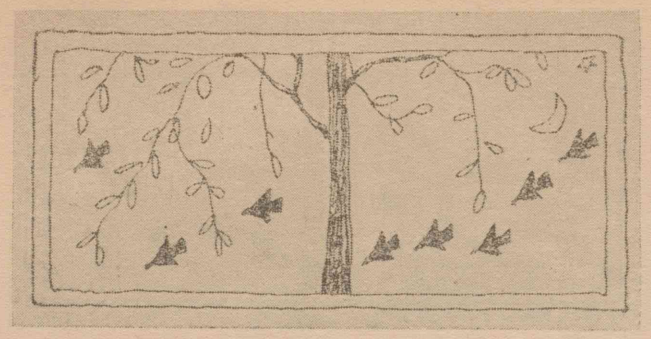
銃の音身ちかくたゐず聞ゆれば土黄色に渦ま
きにける

もぐら少女、もぐら男に行き逢はず土堀りあ
ぐみ息絶ゐにけり

びろうどの服を召したり身も輕く宿たちいで
てゆきて歸らず

ほのかにも花粉匂ふとのぎきしに光に打たれ
息絶ゐにけり

うつとりと瑪瑙のいろに眼をひらき春の鼓動

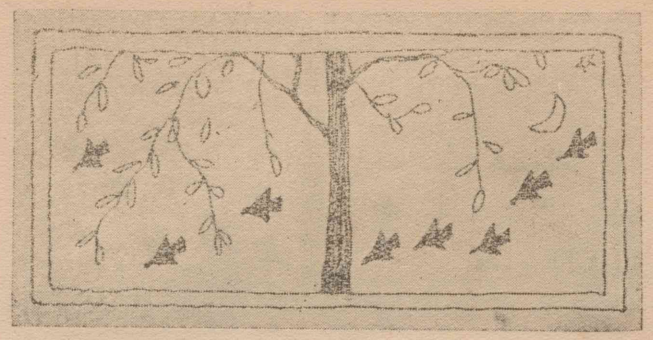


を感じけらずや

朝日影、かなりや啼けばほのかにももぐらも目
覺めうごきうめけり

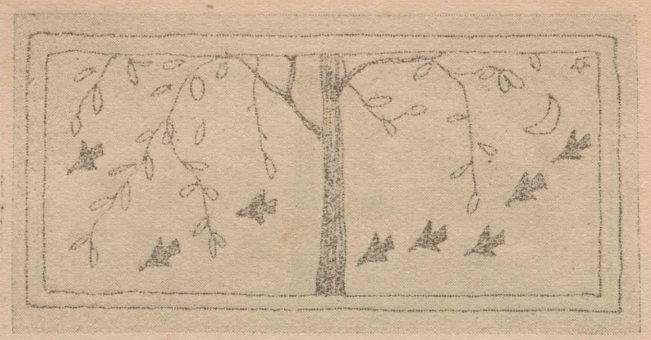
春の雨さんさんとして降りしきる奥底にしも
もぐら輝く

火のごとく雞啼けばびろうどのもぐらは嘆く
曙の底

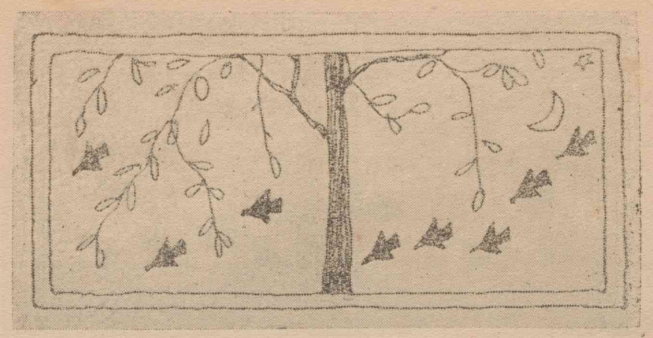


春の現實

高き高き煙突に人仕事せり日にあたたまり世
をば思はず
煙突の頂邊に人ありかゞやける空には春日爛
れもゆるも
一列に兵士は捧げ銃をせり野にほのぼのと青
桐萌ゆる



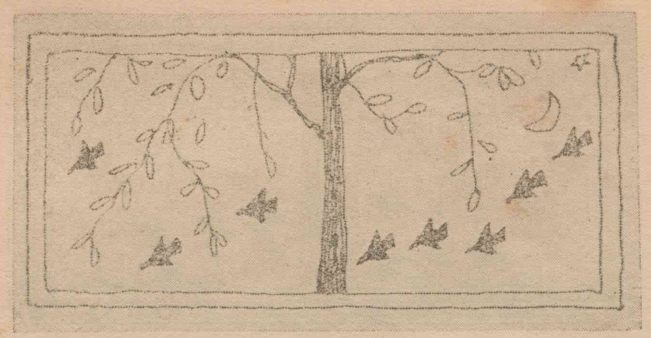
汗くさき兵士寢ころびパン嚙ぢる土手にしみ
じみ春くさのもゆ
野に普ねく春日の照れば人ごゑも特更めきて
きこゆくるかな
野いちめんに雪かゞやけば一點の人は蟻とも
燃ゆて搖れゆく



結ぼれ

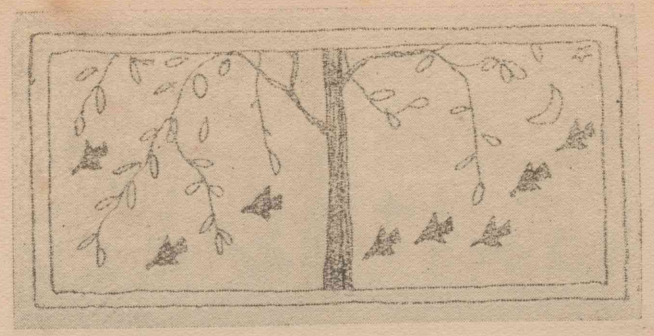
西宮藤朝

結ぼれは斷れてしまつた、
何時の間に斷れたのだ。
さうして「時」に問ふと、
黑いヱールを被いだまゝ笑つてゐる、
白い眼をパチ付かせて默つてゐる。



おゝ一切の靈はばら〳〵になつた、
後尾を引摺りながら
各々に自分の好きな方向に行く
自分の好きな事をする、
自分の好きな事を言ふ。

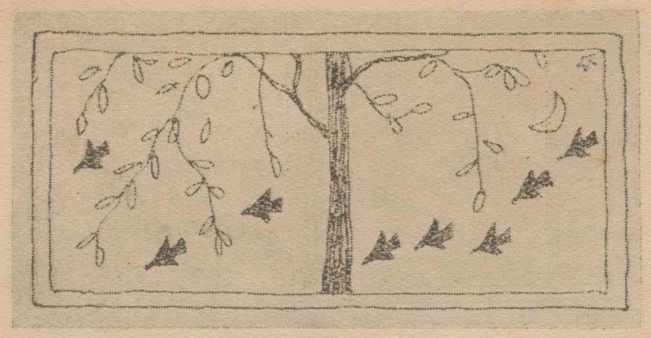
結ぼれは斷れて終つた、
おゝ其の結び目は何處へ行つた。
おゝ「時」は何うしたのだ、
狂になつたのか？　嘲弄つたのか？
何とか言つて呉れ。
或る靈は獸と共に野原に寢てゐる、
或る靈は雲の上に登つて行つて、



姿の無い神と話をしてゐる、
或る靈は自分の生んだ靈を殺してゐる、
或る靈は地上に闇を振撒いてゐる、
或る靈は其の中で呻き苦しんでゐる。

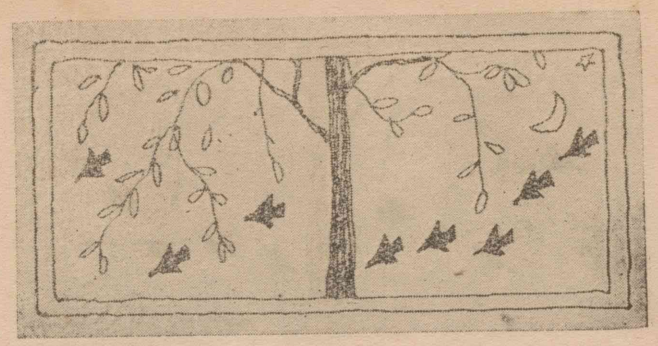
お丶靈等はばら〳〵になつた、
大きくなる者は山のやうになる、
小さくなる者は路傍の小石のやうになる、
さうして此次には何うなるのだ？
其時には人間が無くなるのか？

「時」は何うしたのだ、
其の失つた結び目を何處にやつたのだ、



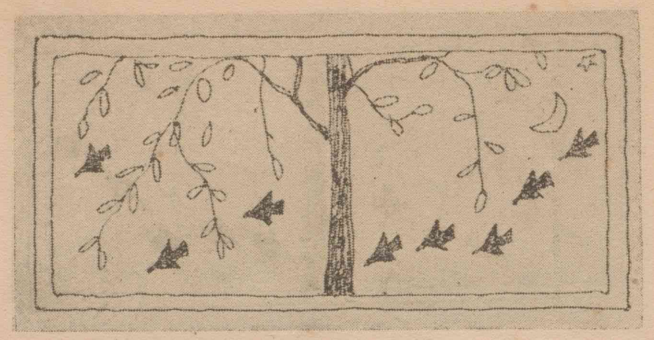
時よ、黑いヱールを被いだまゝの「時」よ。
何とか言つて呉れ、
狂になつたのか？　嘲弄つたのか？
奇蹟は何時行はれるのだ、
失はれた結び目は又元の通りになるのか？
ばら〳〵になつた靈が、
又元の通り集つて來るのか？

醉拂ひが何時醉を醒ますのだ、
穴の中に這つて行つた奴は何時出て來るのだ、
片腕をもいだ奴は何時くつ付けられるのだ、
盲目の眼は何時開くのだ、
零れた涙が何時かわくのだ、



失はれた歡びは何時戻つて來るのだ。

「時」は何うしたのだ、
黑いヱールを被いだまゝ後方で笑つてゐる、
白い眼をパチ付かせて默つてゐる、
何とか言つてくれ、
人間のどん底の血を結んでくれ、
悲哀と歡喜の綱を結んでくれ。

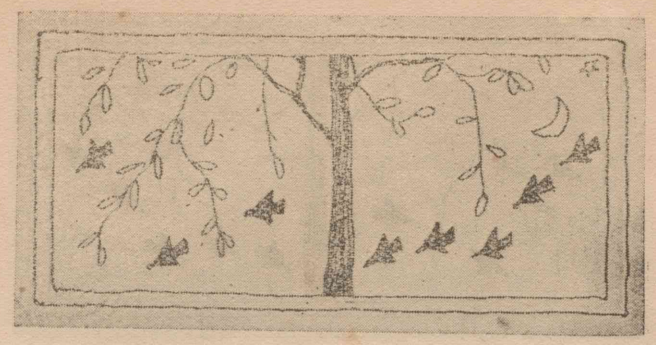


鏡

門間春雄

野蠻人に鏡を見せると、非常に驚くううだ。
ううして必ず裏を返へして見ると云ふ。

政小父と呼んだ狂人があつた。鏡を見さへすれば、敵にでも逢つた樣に怒つて、壞さうとする。病氣が募るにつけ、毎日どこの家に

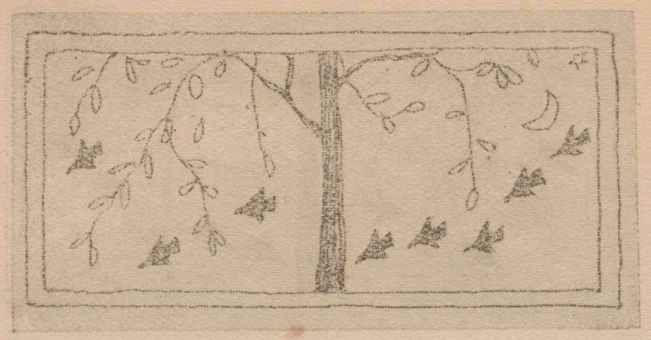


か行つて、鏡を壞して歩いた。斧を振つて、理髪所に押しかけた時、妻と息子が抱きついたら、歯切りをして口惜しがつた。

みかん色の灯のついた行燈に、濃い藍色の夜は迫つて、邊りはコトリとも音がせぬ。一人の老婆が片肌をぬいで鏡に向つた。鏡には、ゾッとする樣な、耳下まで口の割れた、銀の眼の猫の顔がうつって居る。

これは、子供の折、なるべくこの頁だけは開けぬ樣に注意をした草双紙の挿畫である。

祖父に連れられて、理髪所に行くと、「あん

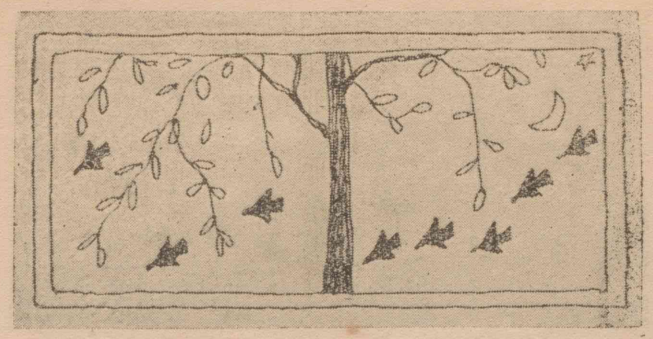


たは、こつちに來なんし」と云つて、一間と離るれば、もう自分の顔ではない樣に伸びたり、縮んだりしてうつる鏡に向はせられた。

祖父は、オランダ鏡だと云つて聞かせた。

子供の折、毎日通學の往復に、鎭守樣の前を通つた。薄暗い奥の院には、いつも、キラリと丸い鏡が光つて居た。この鏡が曇れば村に不吉な事があると云ふ。それは雲形の臺のついた花骨牌の二十枚ものゝ月の樣に丸い鏡であつた。これが御神體であつたと云ふ。

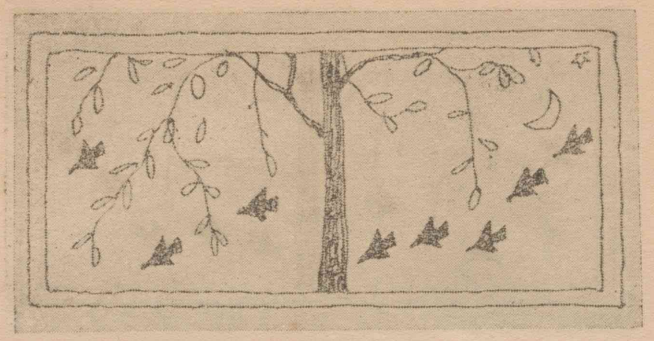
世を忍ぶ虛無僧笠の搖るゝにつれて、尺八



の音は、長火鉢に凭れて、灰に文字書く女の耳に流れる。いり〳〵と出て、軒に立つた女は、赤い袖口からキラリと鏡を出す。眉の濃い、髯あとの青々した男盛りの顔がうつつた。仇討双紙の口繪。

尋常二三年の頃、山内一豐の妻が、鏡の底から金を出して、夫の好む馬を買つたと云ふ話を聞いて、勇んで家に歸つて、母に語つたら、母は其話をとうに知つて居た。

蓮華往生を願ひ出た女が、最後のお題目を唱へて合掌をする時、ふと懷の鏡に氣がつい

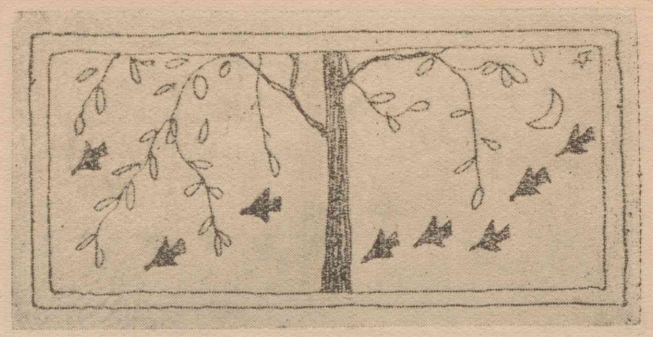


て尻の下に据ゑたばかりに、事が發覺(あらは)れた。

後手(うしろで)にされた坊様達がぞろ〳〵と、お白洲に並んだ事であろう。

「これ、ようお聞きや」と云つて、坊様は、黒くなつた蠟燭の心が傾いて居るのも知らず、御說敎をされる。

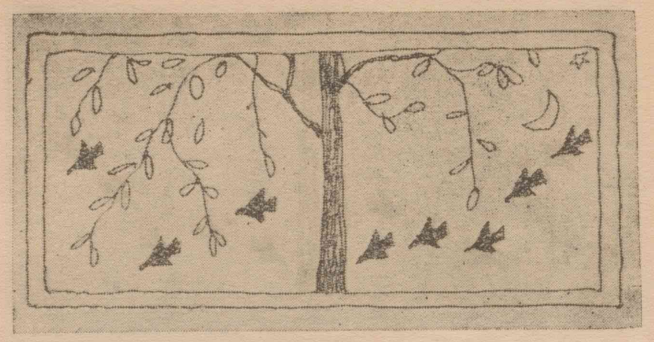
「なあ、鏡と鏡を向ひ合はして立てると、中にはなんにもうつらない様、お互の心に曇りなく……」それを聞いて、子供心に早く家に歸つて、鏡と鏡を向ひ合はして立てゝ見ようと思つたけれど、まだ一度もやつて見た事がない。



鳩

太田宗篤

色もゆかしき紺青鳩の
なつかしき淡紅色の嘴より、
春は……
うつくしき戀の紅玉こゝろ、
まろびいづる……



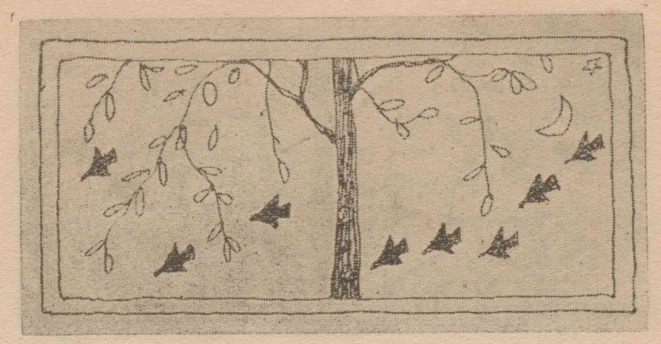
あけぼの

鈴木末造

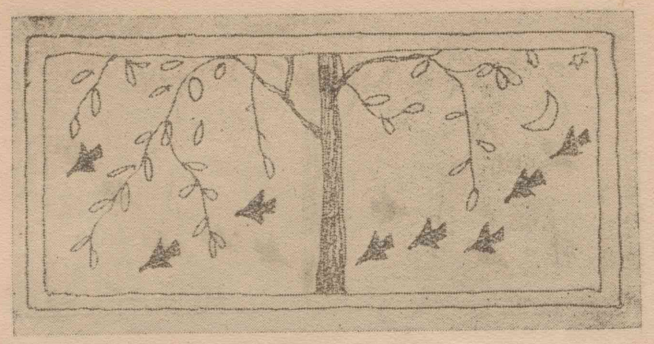
病癒えたる村々のむらさき、
森には駈落の影おぼろ、
見渡す緑野は窓掛をはらへり。

破れ月ほとほと衰へて
光なき命かい抱く。

思ひ變りの空の沼、
心つくしの黒鳥はこぎゆく。



露は小魚の青き眼にみつめ、
ふりかゝる金粉の舞蹈
陽は今浮び出でむとして
地平のかなたをさ迷へり。



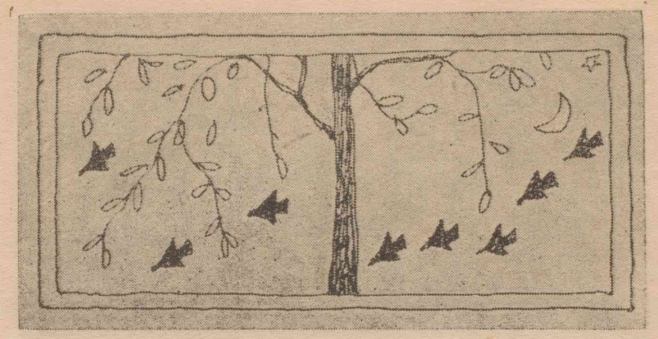
あはゆきさ

唐澤　章

ふれなば消ゆるあはゆきに
似たるなやみに苦しむと
わがこの頃のこのこゝろ
君しりたらば
死すもうらまじ……。

涙の音

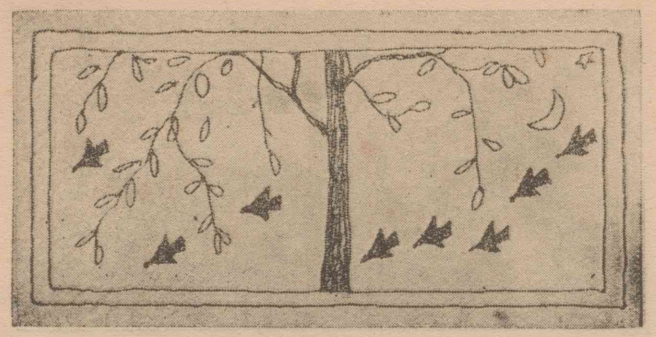
日もすがら



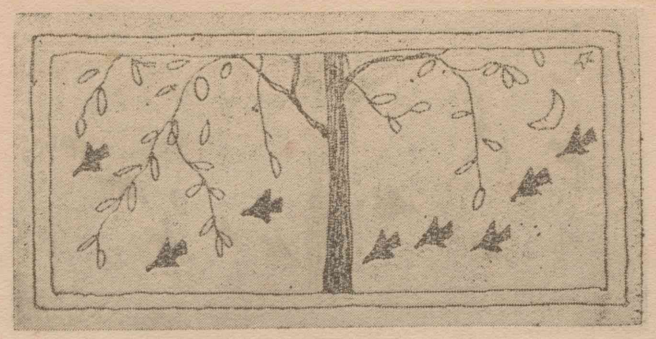
はた、夜もすがら
おもひをこめて松原に
みだれかゝれる浪のおと。

低唱

默して君を想へば
泪ながれてはてなし
默して死をおもへば
こゝろ、泉の如き清らかさあり。
空の晴れたる卯月なれば



なにごとにも心かたむけうる
幸福のさみしさよ。



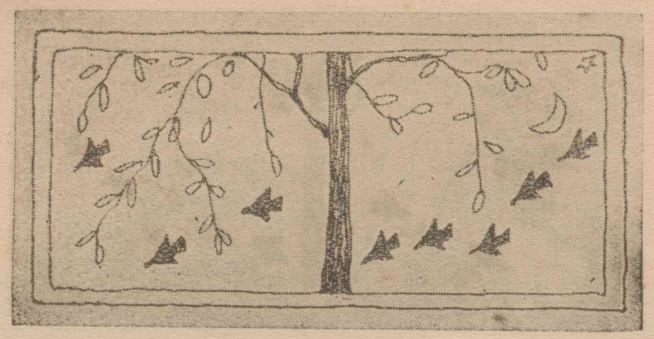
バッカス神に

山内久太郎

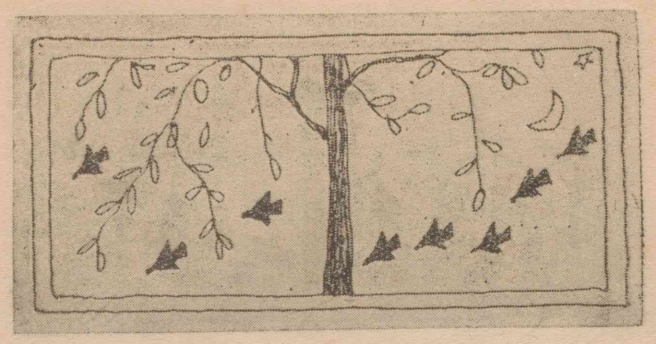
人知れず、
われのこころの地下室に、
戀の泪で釀した甕の酒。

いまし、甕の封を切り、
泡を搔きすて、泡を搔きすつれば、
錆いろの澱のみのこる。

病みなやむ夜の長さに



酸酵期を逸した、
悲しい酒の匂ひよ。

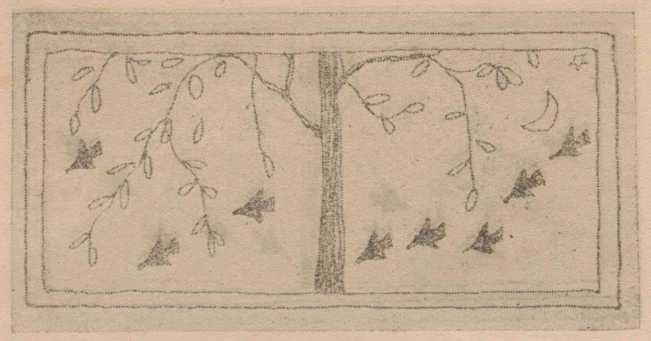


蟲

夜の鈍ぶき青を背に
はいめぐる虫
わがむねに巣くい
蜂の巣の癈滅に
亡びゆくものの力なき眩惑。

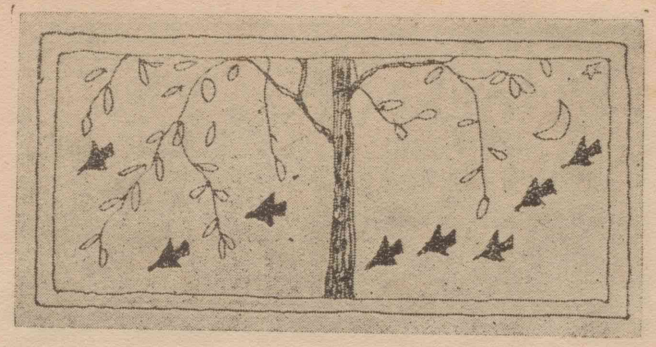
なやましきあしどりに
わがこころはうちひるみ
はいめぐる虫の背に

薄井暮光



憂愁は沼のごとくひかり
わが瞳はうるめり。

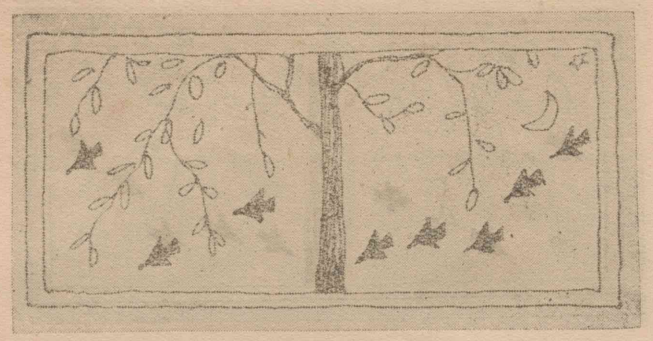
めぐる日と月のごとく
虫はたゞずはいめぐり
憂愁と悔恨と
かきいだきあふひとときに
砂漠のごとき疲れは
幕のごとくむねにひろがり
うす青きむしの背のみかなし。



哀話

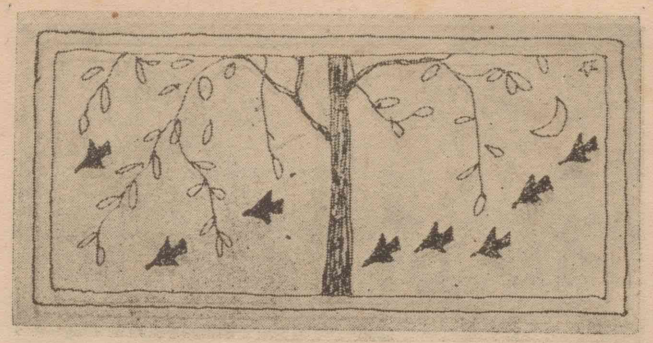
櫻井朱春

晝のはかなさに
なりいでし、あはれ
たらんだ小唄の
かなしさよ。
むしばまれし
わがこころに
ほの青くも泌みて
ああ、
ふりしオルゴルの音はかなし。



夢

五月の夢は
銀とうす紫の夢。
窓下のフラスコなる
きりの花、
晝のうれひに
うらうらと
銀の夢、
うす紫の夢。



小曲

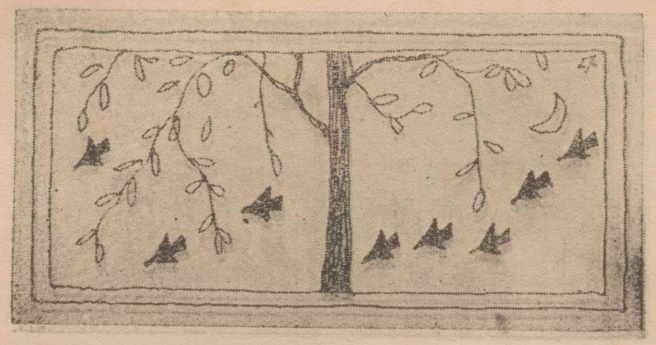
青柳花明

1

つゆくさは
寂しきいろに花をつけたり。
水邊を吾れの歩めば
寂しき顔は水にうつれり。
――こころ泣かるる。

2

靜けさは吾れにたふとし。



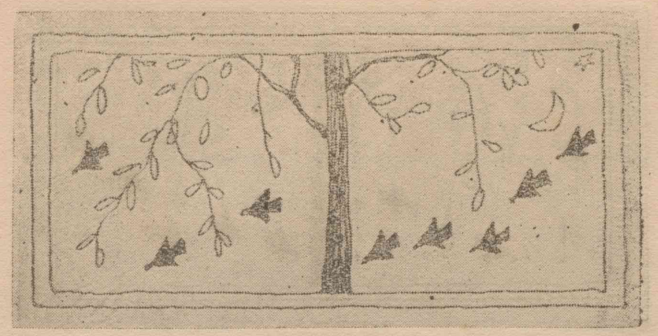
代々木野の立木の下に
吾がこころ春の陽と溶けあへりけり。
ひと日。

3

はる、
野にいでてうとうとすれば
野もうとうとと眠りけり。

4

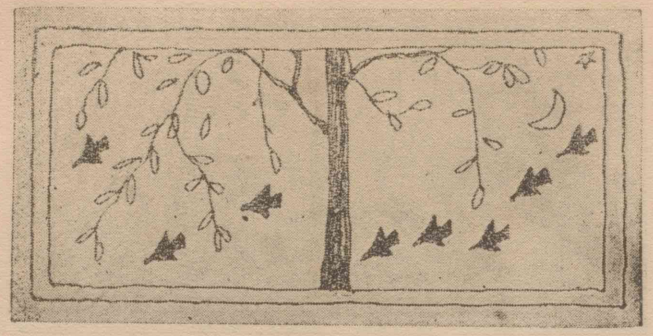
若きめだかに
春の水はこころよし。



吾れの瞳に、
若きめだかはこころよし。
水は唯、静に吾れの瞳とめだかとを泳がしむ。

5

菜の花は
まことま黄いろに咲き出でぬ。
吾がこころ、
ただひとすじに黄なる菜の花をよろこべり。

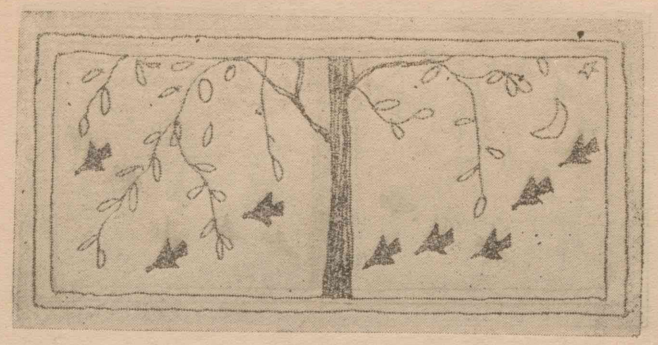


砂上

平井牧村

砂丘、
その輕いスロープには
蒼い三月の浪と、
暖い日光がしたしんで居る。

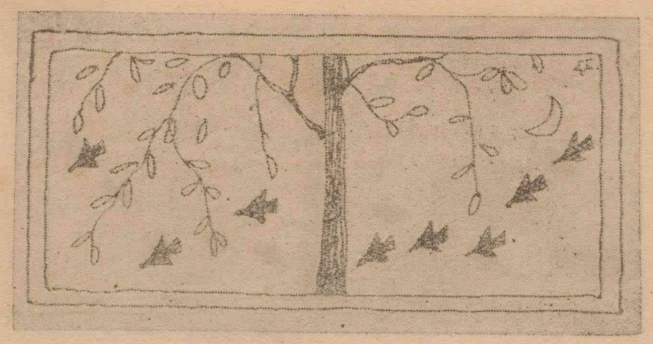
砂上に立ちて
海をのぞめば
魂はすべての感觸を失つて
夢のごとうつとりと



海草の匂を嗅いで居る、
あるかなきかの匂さへ
たゞなんとのう、なつかしい。

眼鏡屋

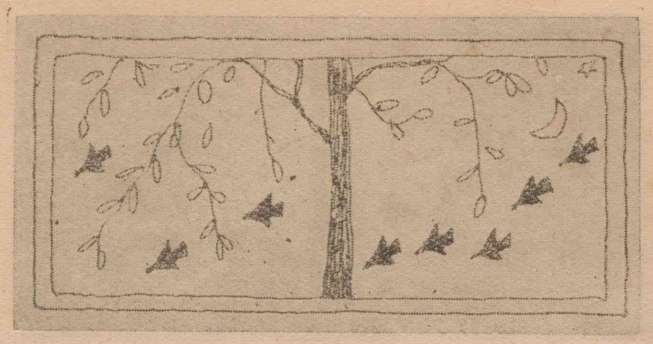
きい〜と
齒の浮くように刻む音……
ぎやまんの玉のすゝりなき。
今日も通りのめがねやの
若い番頭が物思ひ、
物を思ひつ摺る玉に



玉摺機械のうらなみだ、
なんとしよう、
三つの戀がもつれたら……

はつ夏

ころ〜とまろび出でたる
毛糸は青し、
はつ夏なれば
少女心も青からん。

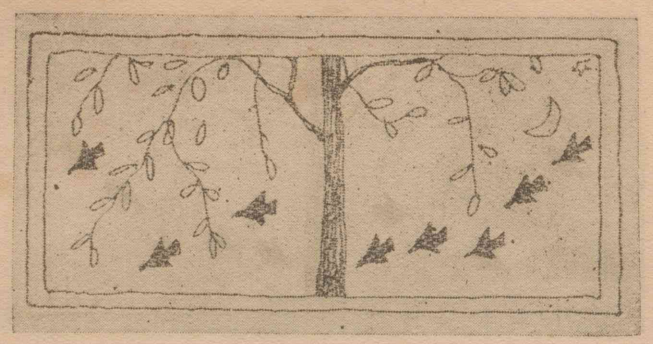


かなしみ

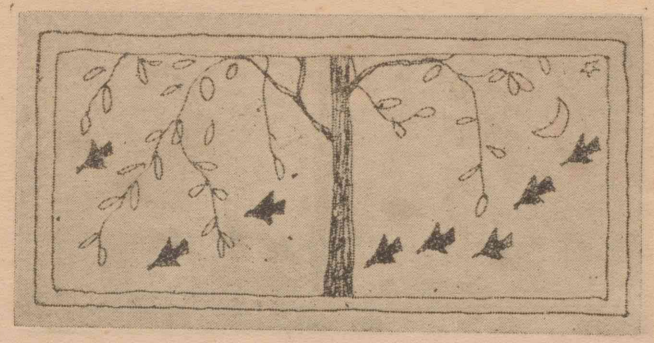
永田滿穗

りこには常に雪降れり。
重くかきたれし灰色の空より
ゆくへさだめずそこはか思ひ、
音なく夢み雪降れり。

かくてしらぐ〜積む雪に
さゞめく胸の笹なれば、
すべての悲しみがそれにまつはり



奏でいづるその聲々のひゞきは
白銀いろにふるへつつ、
うらぶれし
心かすかに啜泣く——

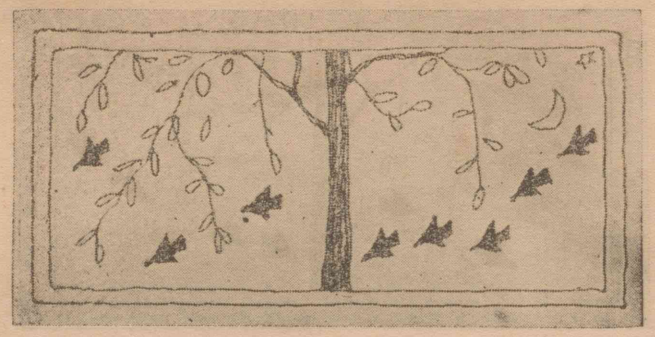


光

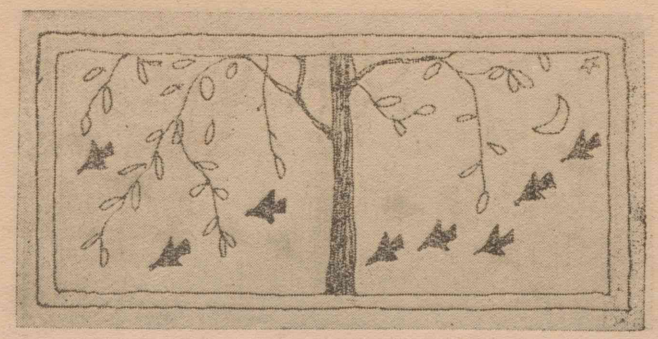
福武鶴二

光は陰をつくりてはひあがり
なやみはまだらに沁みる。
靈魂がくるひ出す
まろびまろび、光と陰をなひながら。

金の小函のくづるゝ
水銀の玉はほどばしり
光にからみて
なやみはてたる感覺、



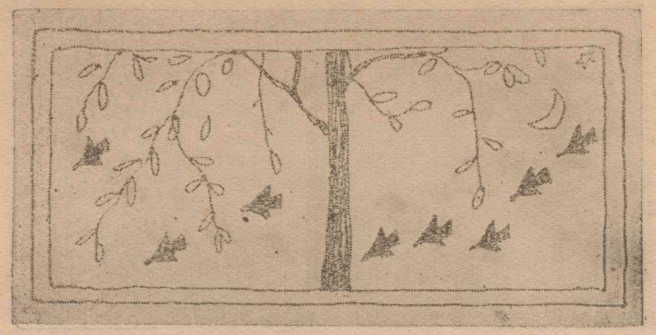
いとしや、狂女の美しき瞳。
光はとけて
恐ろしき紅(くれなゐ)のまぼろしを流す。



賦

川崎薄明

ちらちらと
薄い日ざしにとくる雪、
落日のにじんだ雪の痛ましさ
しやくなげの林のほとり
口笛に小鳥を呼べば
すゝろの心榮に、
淡雪の淡き哀しみ……



猫の瞳

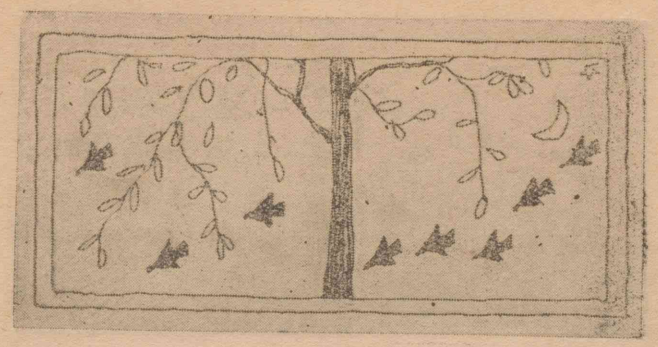
鈴木鐸郎

1

九に一かけては一となり
六より一ひけば零となる、
ひよろひよろと
赤いシャツの鈕が光る、
恐ろしい雞の翹。

2

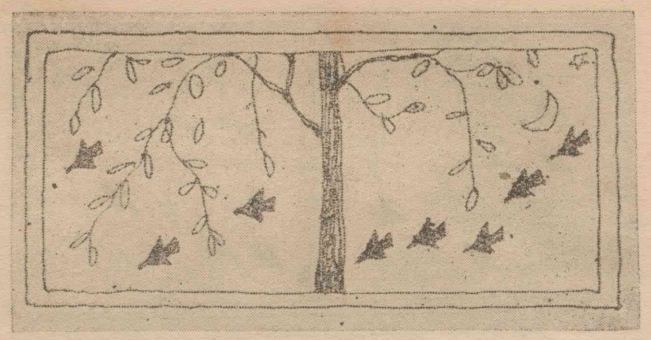
ごろ、ごろ、ごろと



幽かにも三毛猫の
喉には玉がゆききする。
これが酒落だと、
ごろごろ……と。

3

明い廊下の片隅に
温い光を浴びながら
上がり瞳、下り瞳
ぐるぐる廻つて猫の瞳、
しやんこ、しやんこと板が鳴る。



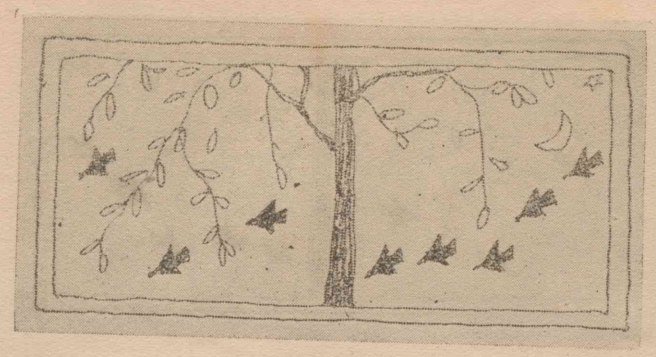
寶玉集

その一

池上修

暮れかけて沼のかなたの木の梢うらさみしさ
に搖ぐなりけり

木は悲し照る日のひかりおとろへし生命(いのち)の上
のその木は悲し

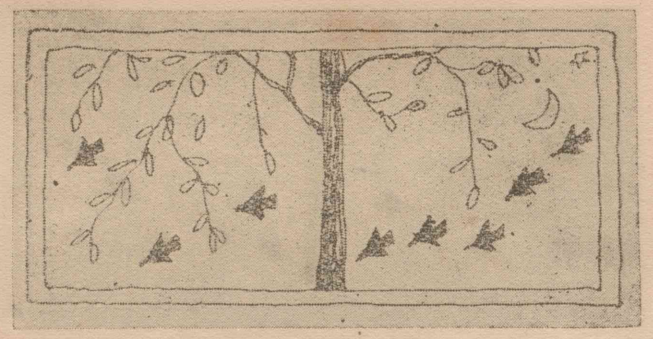


靄のなかに赤く光りて停車場の信號燈ありわ
が愁ひあり

卷煙草くちにあつればほろぼろとわが悲しみ
のうすむらさきに

太陽の落ちゆくころは木々の芽のうす光りし
てわれもさみしや

人間のかなしき謎は謎のままほのかに櫻咲き
うめにけり



何か何か世間がさわぐよな事して死にたいな
あ、蛙鳴くなり

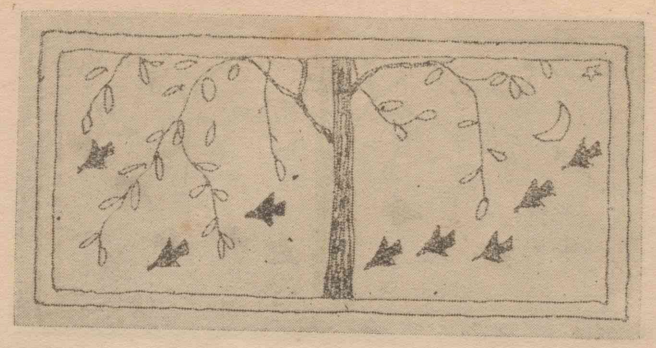
さし木せし木が根づいたといふ母の消息あの
女いま何處にをるらむ

その二

森花葉

うす青き風山蘭の花にあり溪の日暮れは淋し
かりけり

春の日の空一めんのかがやきに眼盲ひぬわれ



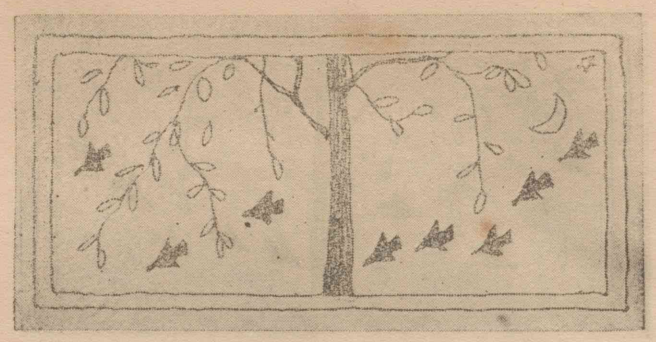
は行方を知らず

罪の子は鉦叩くころよかりけり鉦叩くこそなほよかりけり

開墾の春の土くれやはらかくわが蹠にくづれゆくかな

春の日をあびて草木はそよげどもわれには添はずかなしかりけり

その三　　櫻井朱春



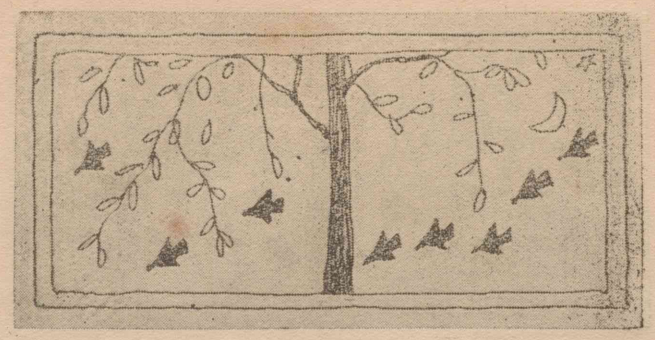
ひさびさにミルクをのめばやや青きくちあたりにもりと悲しまる

ふさぎの虫はやうやくにわれに巣くいてうす嘆きする

緑なる瓦斯の灯を見守りつあはれ都はなつかしきかも

丘にきて瀛車ゆく方を眺めつつ旅なつかしとなみだぐむかも

かの瀛車の窓によりうひ涙する若き女もひと



りあるべし

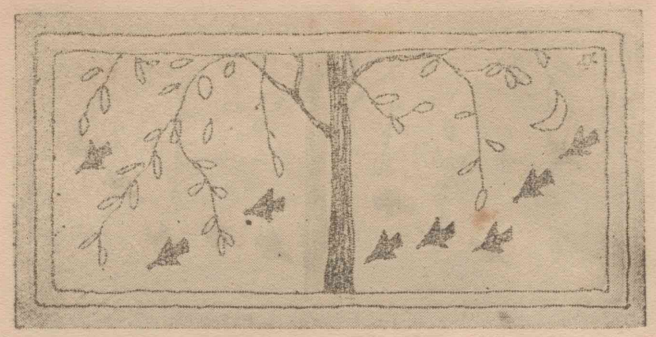
盆栽などに水やれば草木ながらになつかしと
思ふなりけり

くるくるとめぐりて紅しくるくるとまはりて
青しわれの生ぞも

その四

坂本牧川

庭木庭木庭木もすべてゆらゆらと搖げりひと
日雨ふりやまず



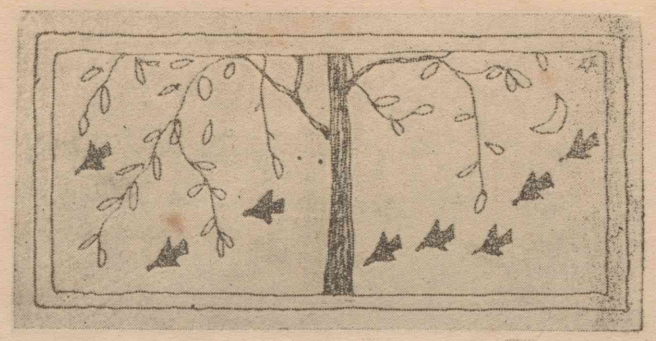
雨後の青ねぎしんしんと青ねぎ畑に日は照れ
りかも

その五

森田二郎

おもひおもひの足のあとかな砂道をひとりし
行けば日の暮れかかる

夕暮の海のしづけさ茫として見て居たりけり
ふところ手して



その六

篠村海桐花

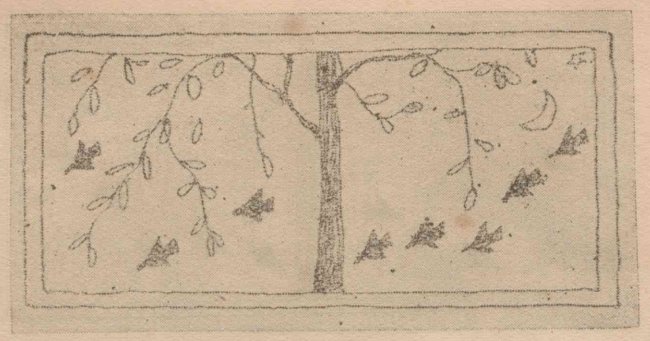
冬が行く――うぢろあるきの目に入りし紅き
木の實のわすれがたかり

その七

戸津たりゑ

ひねびねと霙降る日のうすぐらさわが神經の
いたみいづるかな

君とわかれ悲しき涙ながしたる夕の街にうす



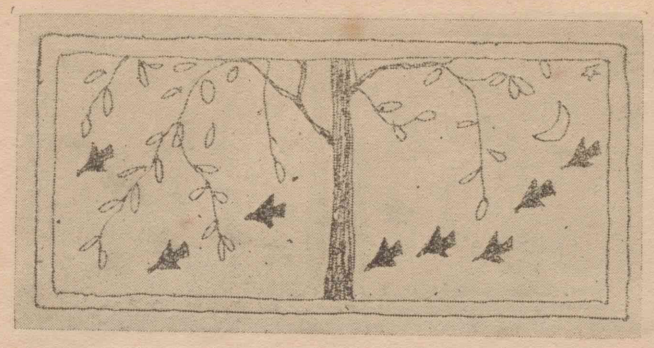
みぢれ降る
魂の消ゆ入るごとく眼をとぢぬ林をわたる風
の遠音に

母とわれ瞳にてものいふことをさゆ冷たき家
のなかにおぼゆぬ

母上よもの問ひますな思ふまま泣きて心の晴
るるそれまで

その八

土田露子



物思へ雪しんしんと闇の夜のともしび燃ゆる
心ぞ燃ゆる

磯貝　彌

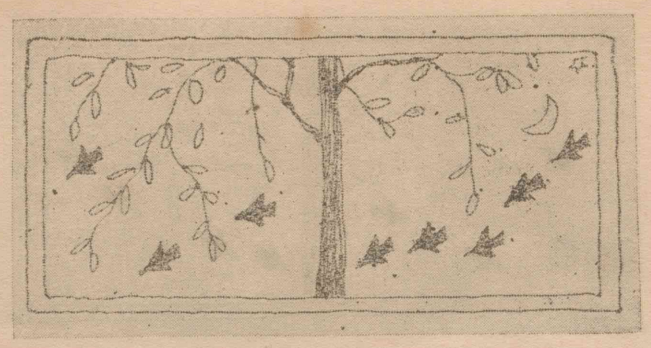
その九

〔泣けなけたんと泣け、もつと泣け〕酒は山吹いろ
に澄みけり

齋藤はつね

その十

わが頬もこのごろすこし痩せにけり木々の梢



の芽もいろづけり

香原一勢

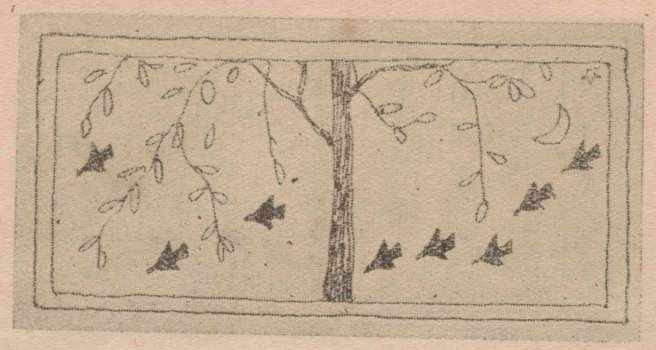
その十一

おほけなく鶯のやぶに鳴くわれ平凡とした
しめりけり

蓮見政雄

その十二

夕空にほの青白き梨の花かなしきものは戀な
りしかな



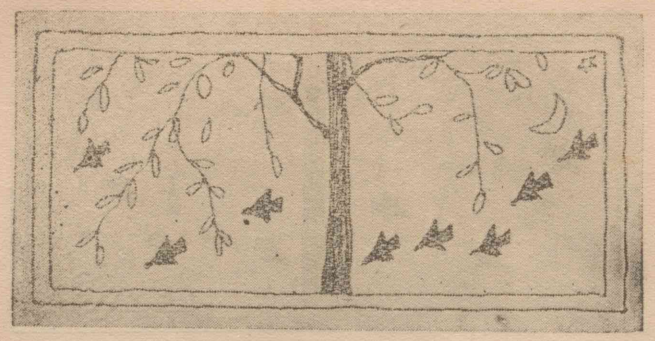
その十三

印田巨鳥

つとふれし闇の木の肌おののけりわがこの頃のいのちの如く

菜の花にくれせまりする夕風どこころしたしみ女を待てり

米とげばわらはれにけり赤き入日三味線草にきゐ殘りけり



その十四

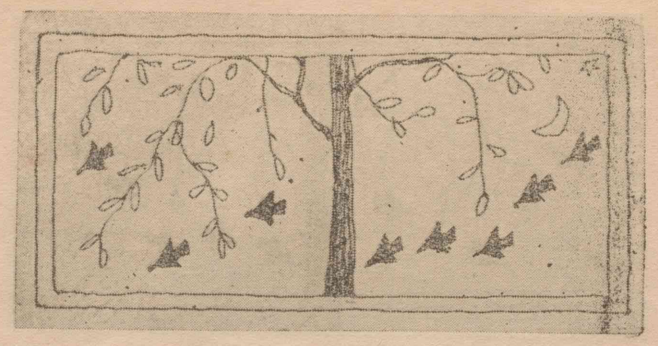
森山譽志男

たちこめし朝のさ霧をなつかしみ朝のさ霧に母病みませり

その十五

比佐絹子

繼母は悲しからずや春雨の夜のまどゐにうちまじり居り

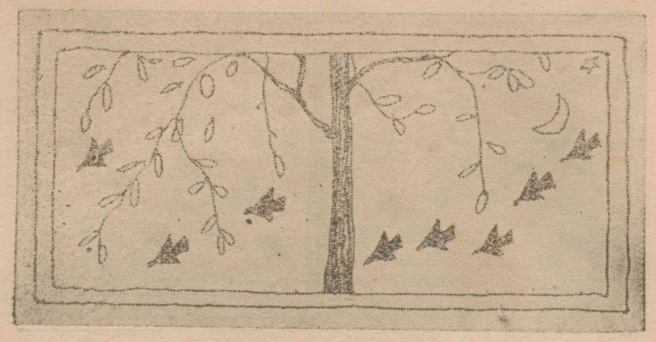


その十六　山路鈴蘭

時は春、われらは少女雨の日の白木蓮をなげく
なりけり

その十七　遠藤秋果

鍬をあげまた鍬おろしとこしへに土を耕(か)ねさ
む土をかへさむ

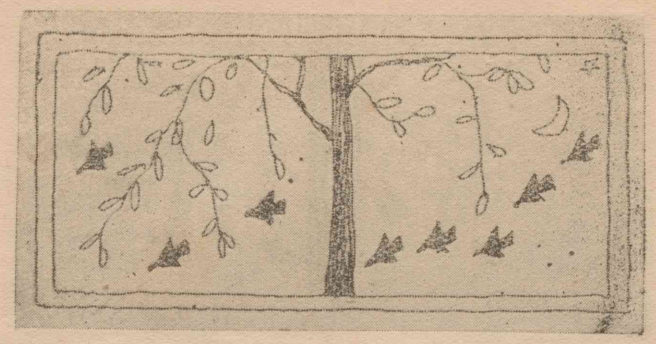


その十八　青柳花明

若草のうすあまき香に小羊もわれももよほす
春の食欲

その十九　村上伸一

寶玉をいだきて若き麥踏まむ麥踏まむとぞ心
の躍る

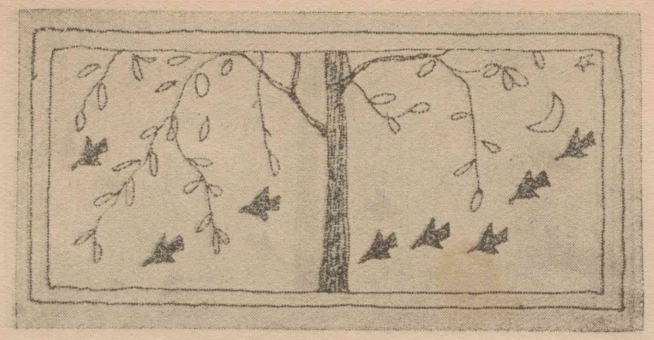


その二十

鈴木末造

この少女憎しむ親の心などおもひあはせつ雪
ふりやまず

雪ははや山に白しといひけるにちろちろと小
鳥啼きいでにけり

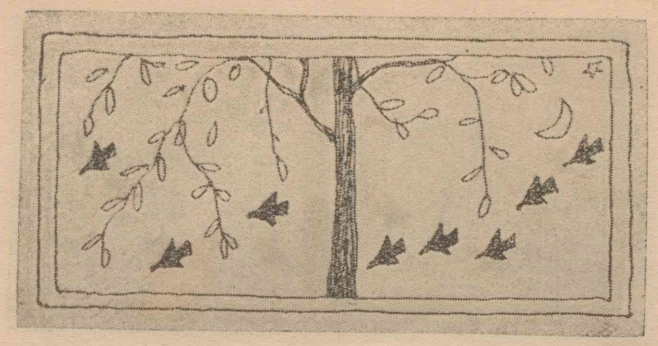


マダム・ギオン

山村暮鳥

クワイエチズム
靜默主義に就て

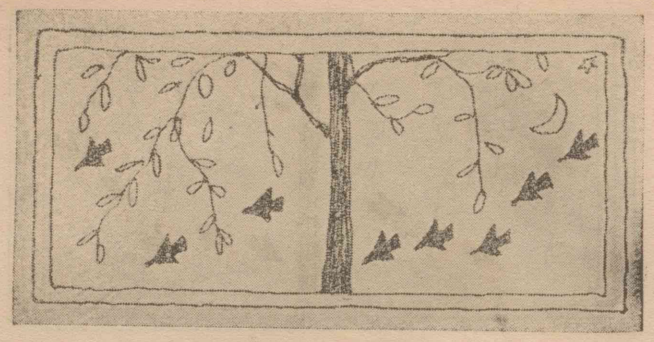
ジャン・マリイ・ボオピエール・ド・ラ・モオトの生れたのはモンタアギイ、千六百四十八年の春四月復活祭なる十三日の夕であつた。病氣がちな幼少の頃から、その周圍の人々に尊敬をもつて遇せられたる宗教的生活の大人（おとな）びた模倣をするのでよく知られてゐた。小さい尼さんであつた。そんな服裝をするのを無上のたのしみとした。四五才で、はやくも殉教を好んだ。學校友達は彼女を白い敷布の上に据ゑ、髪に香油を灑ぎ、そしてその首を斬らうとして準備をさせた。けれどいつも友達の、そんな遊戯に對する勇



氣の失墜は彼女が勝利の笑ひとなつた。

彼女は母に愛されてはゐなかつた。一人の乱暴な弟にこづき廻された。家にありては家蓄かさもなければ下婢等の犠牲かであつた。虐待から怒り易く、怖氣(おそけ)から虚言(うそつ)吐きに、だんだんと育つた。

十才の時、病室でバイブルを發見けた。朝から晩まで記憶に托せて讀み耽つたと、彼女は言ふ。サン・フランシ(聖フランシス)ド・セエルの或る書物と「マダム・ド・シヤンタルの一生」とがその手に入つた。後のものからは強烈な刺戟をうけたやうである。それで、彼女は謙讓を知り、測る可らざる嚴肅の意味を知り、けだかき寛裕で濫費された慈善を知り、歡喜の異象を知り、聖德のほまれに依て行はれた奇蹟を知り、名高き熱狂者が彼女の胸の上に赤熱の鐵をもつて描いたところの聖なる御名、耶蘇、その人格に對する勇敢を知つた。齢僅かに十二才の一少女は、勿論、少女としてではあつたがそれらの事實を自身の上に移して行ひはじめた。人を援助(たすけ)た。むしへた。貧しき者につかねた。そしてその赤熱の鉄である勇氣の失せざるためにキリストの御名なる大きな針をもつてそれを心に縫ひ附けた。尼

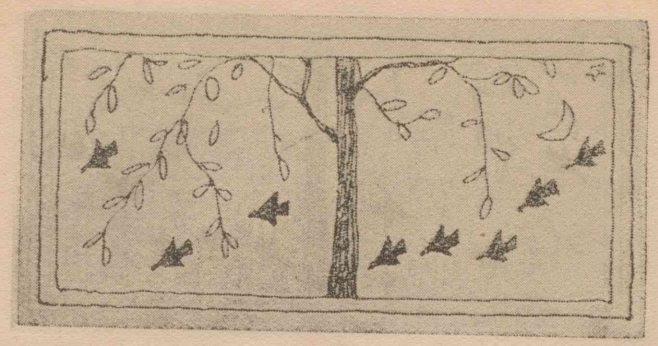


僧となるの認許を得るため修道院に手紙をかいて送つたこともあつた。

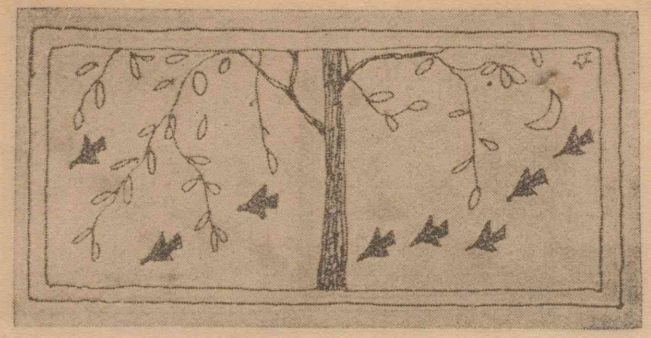
虚欺は直に暴露された。然しながらその努力は如何に彼女がその中に成長したところの宗教的圏圍氣を愛したか、亦、眞理は諄々と説かれるより更に得道に於て順利なるものなるかを示してゐる。

成熟と共に、宗教は虚榮に彼女を讓つた。その華美な容姿(すがた)と匂やかな言葉の力とは彼女をして社交界の花(ラジアンス)たらしめるのに適して充分であつた。身のまはりの裝飾に氣を奪はれるやうになり、美貌に於ける競爭に敵を作り、嫉妬の炎を燃やすやうにまでなつた。その年齢の聖女テレサの如く、物語りめける書物などに溺れて夜を更すことも珍らしくはなかつた。自叙傳を見れば武狹と情欲とのそれらの文字に影響されたその乱行の經驗が瞭(あきら)かにされてある。十六才になるやならずで彼女は富豪なる、二三日前に相見たばかりのエム・ギオンと結婚した。この紳士は彼女より二十二も年上であつた。

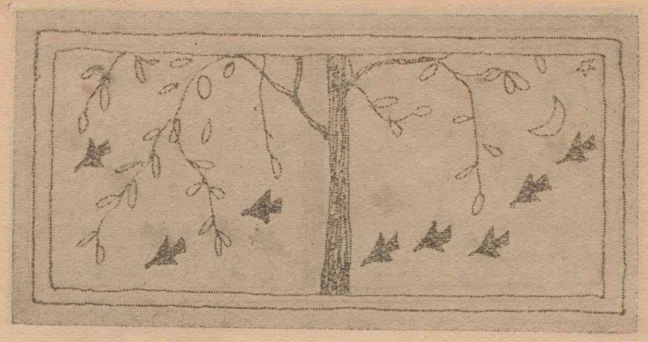
彼女の過失(フオルト)に就ては何等嚴格な記錄はないが、唯、良人の家の運命が彼等(彼女と其良人)を矯正するために數年間の全く憐憫のない學校であつ



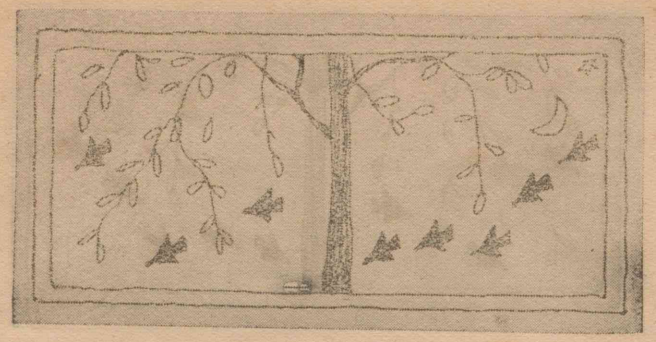
たことだけは事實であ。良人はその母と一所に住んでゐた。その母は野卑で頑固で吝嗇であつた。こんな性癖がその富に遺憾なく現はれてゐた。そんな金の中にゐながら銭一文のことですら口喧しく厨室を罵り廻つて、それで幸福な女であつた。偏狹な量見の全力を擧げてその母はギオン夫人を憎んだやうである。良人は利己的からではあつたが兎に角其の妻を愛した。彼女が病氣にでも横はらうものなら彼は全く慰藉無き者の如くであつた。彼女に對して強い言葉を返すものを見れば忽ち情火の中に飛び込んだ。然し、母の煽動で、絶えず苛酷に彼女を遇つて、止めなかつた。彼の痛風の脚によく仕えたところの一人の器用な少婢はそれを知つてゐて何かと彼女をなだめたり相談對手になつたりした。生家に於けるギオン夫人は何時も優麗、そして雅美、良人の屋根の下では丁重が誇りとして賤められ叱責せられるのである。物を言ふ時には立てられた耳で聽かれ、唇の動くや、反駁なしにはすまない。從つて凡てが愚圖々々として見られ、進んですれば好爭的に取られた。結局、だから無作法にも沈默するの外なかつた。生家に來て、歸れば棘のやうな言葉で迎へられるし、兩親は兩親でその新し



い結合のため反自然にも我が子のやうには顧みず、冷淡である。姑は毎日、起るから寐るまで巧みな惡意で絶えず鮮かな憤怒を燃やしてゐる。年若き少女の汚れなき靈魂は全くやぶれざるを得ず、破れた。彼女はろの頃既に聰明と奇智とによつて令聞高きものであつた。ろこで彼女は交友仲間と夢寐に犯され、精神病的に、固くなり、ろして默想した。まるで一幅の阿呆の圖である。集會毎に彼女は對者として撰まれた。訪問の客は彼女が攻擊される目録の中は導かれた。胸に悲痛も湧くであらうよ。一切はろの欲望と異ふに、心に適する何をか彼女は求めればならない！　しかしろれは遲かつた。長くもあらぬその生涯の物語はいつしか過ぎ去つた。彼女の悲哀を掬すべき心をもつ友は一人だに無い。少時、彼女はすべての義務を缺けなく遂行して、些の怠慢もなかつた。深切と忍耐的の快活と惡を善に取ることに依て、より深切なる待遇を救はんと努めた。感情的な言葉を返さぬためにその舌を斷切らうとさえした。隱さうとしても隱すことのできない涙でわれと我が身を慘酷にも苦めた。然し彼等の粗野で頑迷な性質には勝ち得べくも無い、如何に大なる寛容もこれにはむざろさ呆れた。けれど如



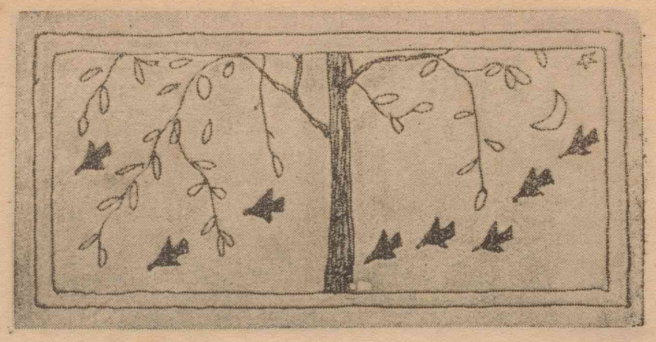
何にして彼等の心は斯も和かぬのであらう、寧ろ不可思議である。彼女は最善の課程として自信をもち、その絶頂に向つて戰つた。彼女は正しく一家の主婦としての權利を要求し、良人と姑との何れにも結びつけられて中立し難き責任を宣言し、良人と彼女との間にあつて何等軋轢の種を蒔くもの無からしめんために、その良人をして、結局、妻か母かの撰擇をなさしめるの必要があつた。エム・ギオンは普通一般の型(タイプ)に屬する男である。彼等は高く社會の眼の前に立つ、當然に、主義の人として。然しその家庭の風色は反省の缺乏と利己的情慾的無分別とより悲慘なものである。彼等は一旅人に對する殘忍なる行爲の代償に於て愕然たるべきであつたが、しかも決斷と自制とそれに依てその家庭の義務の包含される或る意識的估價との無いため、彼等に最も接近したる此等の上に猶幾何かの年月の精神的苦惱を科すであらう。もしも彼がその責任を等閑にするやうなことがなかつたならば彼が間接にその著者であつた不幸は彼の前に携えられ、彼或は正義の側に意を決し、從つて家庭的革命がその結果をなしたであらう。ギオン夫人は獨り沈默にあつて一切を忍ぶべく思ひ定めた。斯る憂き事多かり



し日を回想しては胸に彼女の堪えたりし規律正しき父の顏面(かほ)を描いた。神意は愛と賞讃との下に開拓せられたる庭園から凡ての過ぎ行く人の足が塵埃の中にそれを蹂躙する街頭にまで自我(せるふ)を移植した。

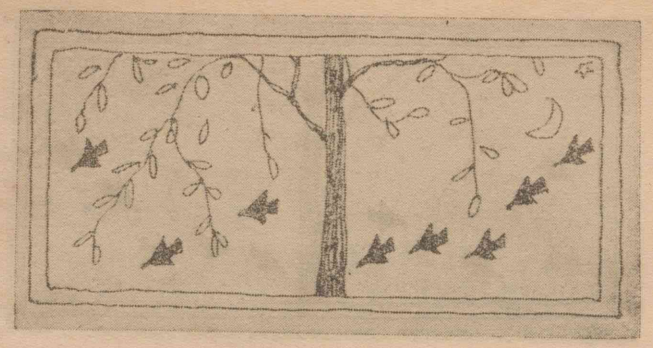
死の手のはげしき疾患に彼女は幾度か墳墓の邊までたづさえくれた。生きんとする望みにも惹かれなければそんな場合の危險も無頓着に聽きながされた。重大なる鐘が家族の上に鳴つた。彼女は平然たるものであつた。病院に於ける臨終は豫期せられた。いつもながらの貧と苦とより寧ろ現在の艱みは得堪ねられるもの、何等の成功には伴はないが彼女は兎も角その宗教的經驗に慰安を見出すべく勞働した。また、峻烈に自らを試練した。たえず懺悔した。身のまはりに就ての一切の思ひ煩らひを屈服せしめた。

婢女がその髪の毛を梳いてゐてくれる時ですら、搆はないのも甚だしい、トマス・ア・ケンピスの書に眼をさらして夢中であつた。或日、彼女は五ヶ年間の短かからぬ退隱より出で來たばかりの聖者なる一人のフランシスカンと相見えた。「夫人よ」聖者は唇(くち)をひらいた。「むん身はのぞみを失ひ、そして惑乱してゐる。それはむん身が内にもつべきものを外に求めてゐるか

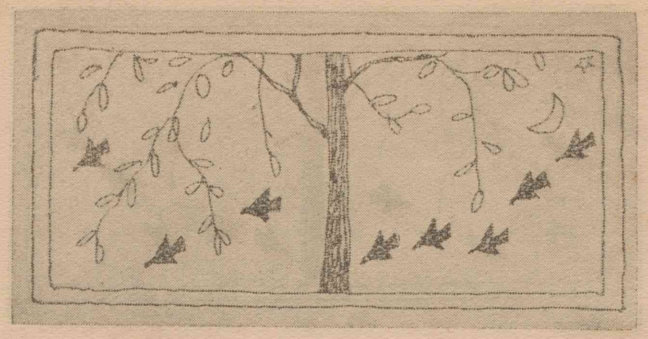


らだ。むん身は、むん身の心の中に神をたづねなければならぬ、さすればおん身は彼(神)を見出すであらう。」

年老ひたる此のフランシスカンの言葉は何時の世に於ても神秘主義の宣託によつて語られたる應照を體現する。それは人々の理解に從つて眞理ともなり虚僞ともなる。そこに價高き檀香木から聖母(マドンナ)の影像を彫りいださんとした藝術家の古きものがたりがある。然し物質は馴致し難きものである。彼の手はその妙技を失ふたやうに見ゐた。彼は彼の理想に接迫することが出來なかつた。絶望して正にその努力を放棄せんとするや、夢の中に聲があつて「樫の木片を取れ、而してそれに形れ(かたちづく)」と。粗末なる樫の木ぎれはその時危く爐に投入れられんとするところであつた。彼は直にその聲に服し、そして有名なる傑作を出した。此の物語は迷信的な外形主義の敵手として表はれる時、神秘主義の高く支えて保つところの眞理を反映せしめて

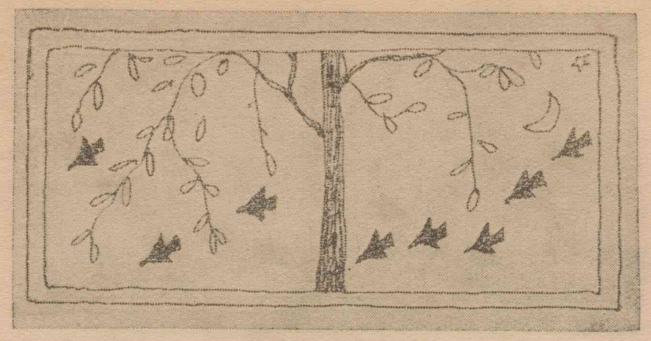


ゐる。宗教的の幸福の物質は、固有のすがたで手近く家庭的に普通にそして爐をとり圍むところの感情と嗜慾との中に横はる。正しき方向、天上の靈感をして外界より受くるところあらしめよ。天は愛の家庭を願み、家庭は天の希望によつて淨化される。はるかに携へられたる外部的な仕事の、齷齪として利己的な禁欲主義や祭司職業の値を以て云々すべからざる天に對する賣買は、決して靈魂を贖回し、亦、改新して平安にすることは出來ぬ、しかも神秘主義は此處に止まるのではない。更に一歩を進めた。で、その一歩は虚僞である。それは外部から靈魂をあまりに引離すであらう。そしてまたその靈魂を係蹄(わな)より自由ならしむべく必要な救助をも他に移す。恰も地を覆ふ樹木の如く、樹木は嵐の暴力から低き立木を隠す、けれど樹木はまた低き立木の目がけた日光を遮る。それは保護する。それは奪ふ。そしてその樹木の下に執拗な雜草は青々と貴重なる穀粒より更に丈高く繁生するのである。こは的確なる對稱には非ざるべきも靈魂に關する熱心に於て、それは嚴烈でしかも病的な自我意識を跋舞する。ロオシア・ノオスは我等に、彼と彼の兄弟がモニュマンの巓に立つた時、その身を下へ、下



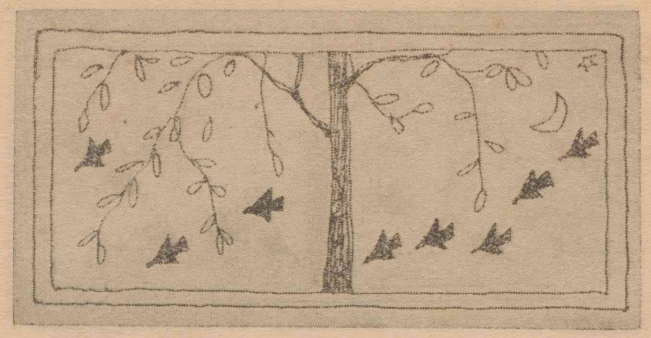
の建物（ビルディング）の上へ、投げ落さざるを得なかつたと語つてゐる。神秘家の眩（めくるめ）くほどの高潮は、時に、人格の高慢と相似たる感覺を産出する。

われらが虚弱な稟性や生命に對する普通律法の向上に換えて屢、神秘家は怠慢極まる妄想の遊戯をなし、最も謙讓なる反動の犠牲となる。興奮せる過激な氣質は外界よりの証左を熱せる神經の微動のために誤まる。孤寂、靜默、さては大なる沙漠の眺めに於て、旅人等はありありと我がふるさとの寺の鐘の音を聽く。斯る場合の極度なる機能の感受性は特種な風候によつて惹起され、純眞の思想もしくは記憶を實在せる音響の力に與へる。そして同じく神秘家は屢々蠱惑し、また、それ自身罠にかけられる。我と我が呼吸が「天よりの微風（エアース）となり、地獄のあらし」となる。自我（セルフ）を虚無にする企圖は遂にその自我を後方にするのみ何物をも殘さないので終りを告げるのであつた。單純なれど人情、その法外なる緊張にもはや得堪えざる故に熱狂のうしほの引く時――そこで彼（か）の魔法使にして手品師なる幻想（ファンシイ）は神秘的經驗を呼び還すべく伸すべく、然らざれば碍ぐべく招き出され、妄想的輕業師なる情愛はその詭計を弄ぶべく許された。恰もナイル河の水の退



くや否やカイロの水路は舞臺となり、その上で兩岸の群集に戯術者（てじなし）がうの巧妙な藝當を見させるやうなものである。

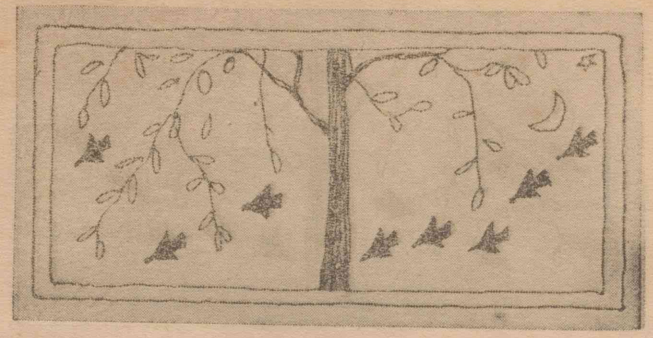
さて、ギオン夫人に歸らればならぬ。



肉體の合奏の進行曲

山村暮鳥

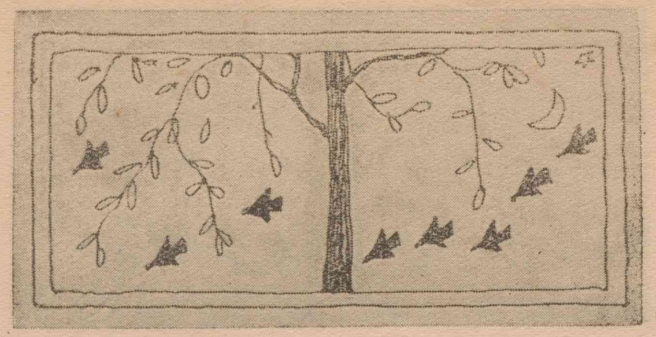
まつてゐるのは誰。土のうへに芽ぶいた草がおどろいてゐる。それに焰をなげつけ、投げつけてゐる絶望の太陽。時でもない心の日向葵のうめきの音樂。永遠に生れない畸形な胎兒のダンス、りのうごめく純白な無數の足の影。わたしの肉體は底のしれない孔だらけ……銀



の長柄の投鎗で事實が夜の讃美をかい探る。わたしをまつてゐるのは、誰。

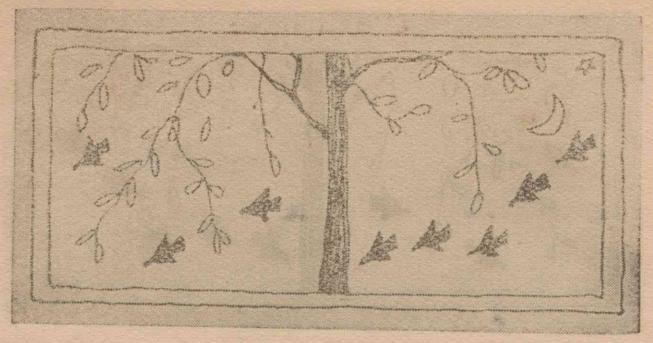
黎明の跫音が近づく。蒼白いともしびが泪を滴らす。眠れる嵐よ。おお、めぐみが濡らした墓の上はいちめんに紫色の罪の靄。神經のきみぢかな花がふるへてゐる。りれだのに病める光のない月は叢の消ねさつた雪の匂ひに彼女をみつけるといふのか。嵐よ。わたしの幻想の嵐よ。未來よ。

わたしを廻轉る悲しい時計のうれしい針、奇



蹟がわたしのやわらかな髪を梳る。誰だ、わたしを呼び還すのは。わたしの腕は、もはやかなたの空へのびてゐる。青に朱をふくめた夢で言葉を飾るなら、まづ、酔つてる北極星を叩き落せ。愛と沈默とをギオロンの絃のごとく貫く光。のぞみ。煙。生。そして一切。

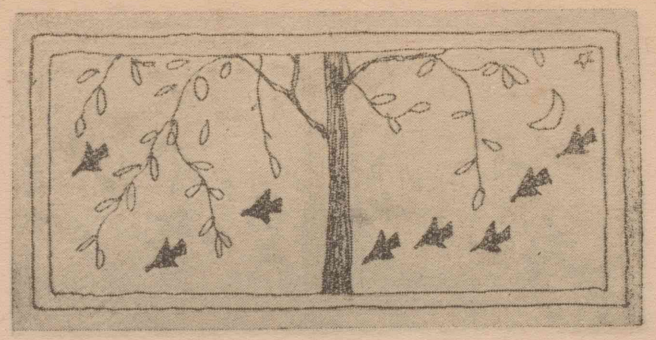
蝙蝠と霜と物の種子とはわたしの自由。わたしの信仰は眞赤なくちびるの上にある。いづれの海の手におちるのか、靈魂。汝は秋の日の蜻蛉のやうに慌ててゐる。汝は書籍を舐る蠧魚と小さく甦る。靈魂よ、汝の輪廓に這ひよる脆い華奢な獸の哲理を知れ。翼ある聲。



眞實の放逸。再び、汝はほろぶる形象に祝福を乞はねばならぬ。

靡爛せる本質の淫慾に湧く智慧。溺れて、自らの胡弓をわすれよ。わたしの秘密は蕊の中から宇宙を抱いてよろめき伸びあがる、かんばしく。

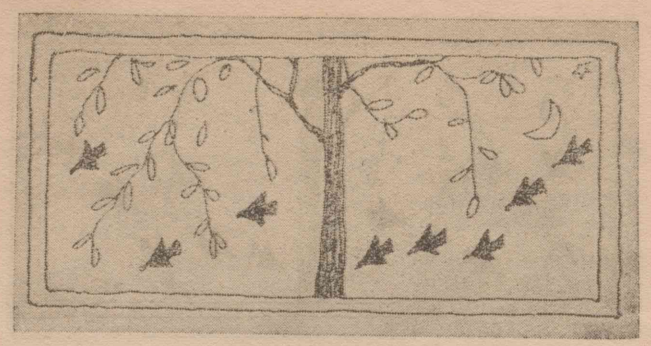
わたしのさみしさを樹木は知り、壺は傾くのである。うして肩のうしろより低語き、なげきは見ねぬ玩具を愛す。猫の瞳がわたしの映畫の外で動く。朦朧な水晶のよろこび。天をさして螺旋に攀ぢのぼる汚れない妖魔の肌の香。



いたずらな蠱惑が理性の前で額づいた……

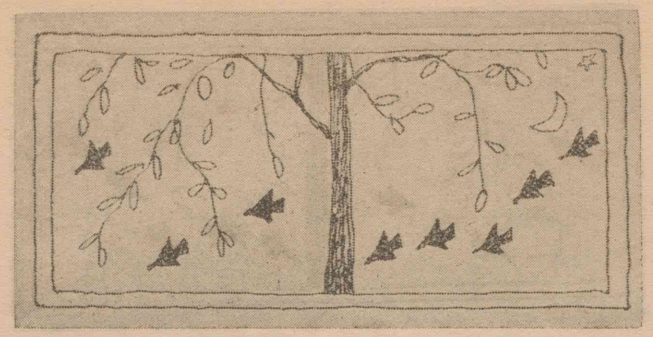
何といふ痛める風景だ。何時生れた。どこから來た。粘土の色と金屬の音とのいづれの悲しき樣式にでも舟の如く泛ぶわたしの神聖な泥溝のなかなる火の祈禱。盲目の翫賞家。自己禮拜。わたしのピアノは裂け、わたしの時雨はとほり過ぎてしまつたけれど執着の果實はまだまだ青い。

はるかに燃ゆる直覺。欺むかれて沈む鐘。棺が行く。殺された自我がはじめて自我をうむのだ。棺が行く。音もなく行く。水すましの



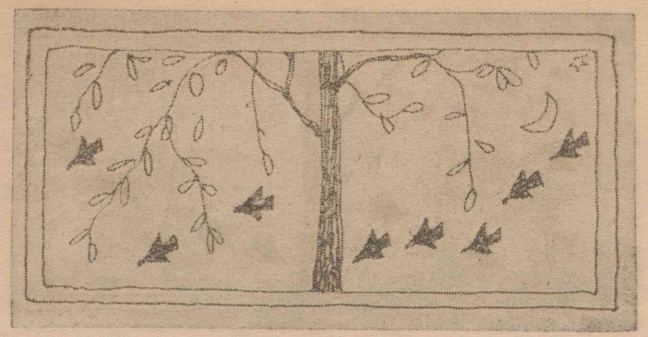
意識が廻る。

黎明のにほひが近づく。落葉だ。落葉。惱む妄想。咽びまつはる相思の落葉。欲望に、且て、彼女の髪に秘めた綠色の記憶をもとめるのだ。人形も考へろ。双掌の平安もおよぎ出せ。いま隱れたる暗がりに泌み滲みいのちの爪のうなりがする。歡樂も來よ、蛇も來よ、わたしの伴侶に。しろがねの弦を斷ち、幸福の矢を折挫いてしくしくキユピトが泣いてゐる。意專念、私ははてのない憂愁の逕をたどり急がう。



たづたづとりの瞳をみひらくわたしの「死」の螺馬。わたしを乘せた螺馬――論理の血。世界を失ふことだ。うれが高貴で淫卑なサロメが接吻の塲となる。ソプラノで。すべて、ソプラノで。殘忍なる蟋蟀は孕み、蝶は衰弱し、水仙はなぐさめ無く、かゐらぬ鳩は眩ゆきおもひをのみ殘す。

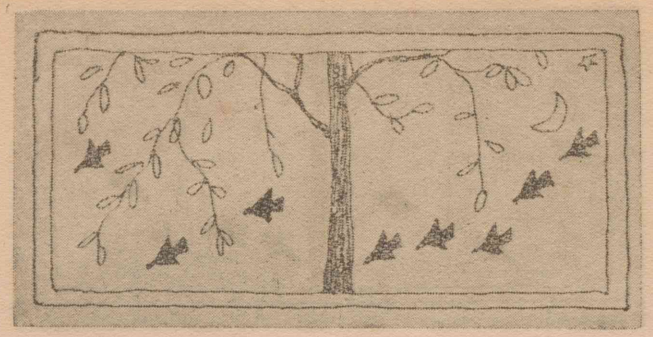
おお、欠伸するのはセラピムか。黎明の聲が近づく。わたしのろくでもない計畫の周圍をさ迷ふ美以上の美の懺悔。微睡の信仰個條。むかしに離れた黑い蛆蟲。鼻から口から眼から耳から這ひ込むキリスト。藝術の假面。うこ



で黃金色に偶像が塗りかゐられる。

まつてゐるのは誰。うして、わたしを呼びかゐすのは。眼瞼のほとりを匍ふ聖靈のもの言はぬ狂亂。鈎をめぐる人魚の唄。色彩のとゞめを刺すべく古風な顫律はふかい所にめざめてゐる。靈と肉との表裏のある淡紅色の窓のがらすに觸れて、漸と、善惡不立のたつた一つのあるかなきかの疵を發見けた。(重い頭腦の上の水甕をいたはらねばならない)

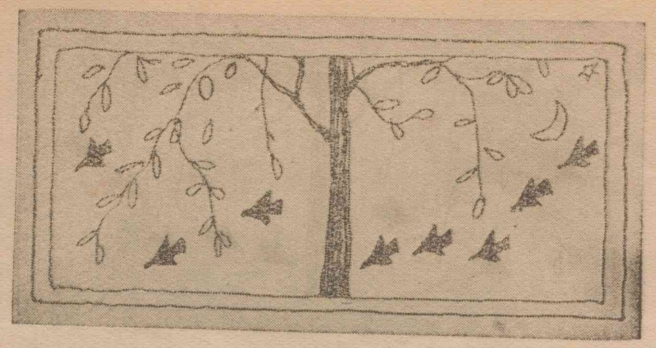
わたしの螺馬は後方の丘の十字架に繫がれて、ゐる。うして懶く所在なさに鳴いてゐる。



おお、日本。わたしは汝(そなた)のために薔薇の戴冠式を踵の下で祝するぞ。汝は童話の胸に凭(もた)れた螺馬か。

わたしを待つのは汝でない。それは見ぬ彼女だ。彼女と相見るところの現實の中心、おお、爪立てる黎明のゆびさき。大空を楯としてわたしと夢のながい凝視、それが、又、無始無終の刹那を創(つく)り、孤獨の無智への飛躍をする。

わたしの騾馬はうしろの丘の十字架に繫がれてゐる。そして懶くこの日長(ひなが)を所在なさに糧も惜まず鳴いてゐる。

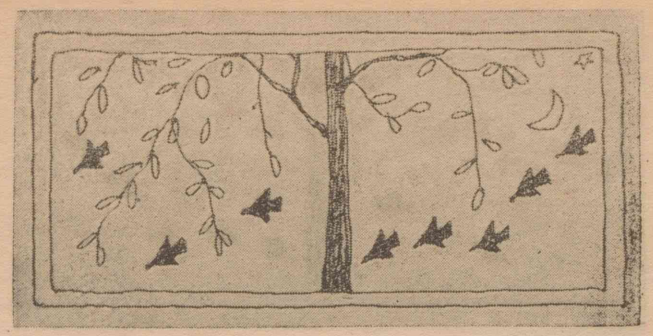


青空に

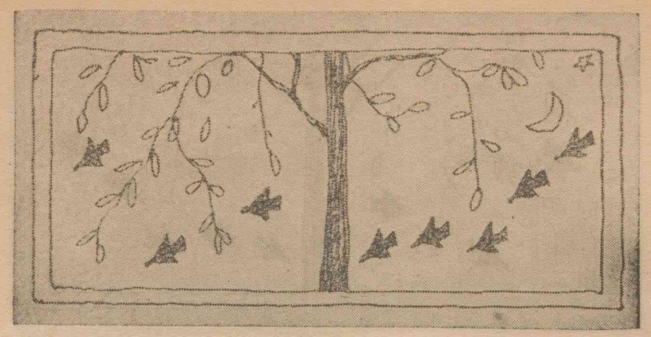
青空に
魚ら泳げり。

わがためいきを
しみじみと、
魚ら泳げり。

魚の鰭(ひれ)
ひかりを放ち、



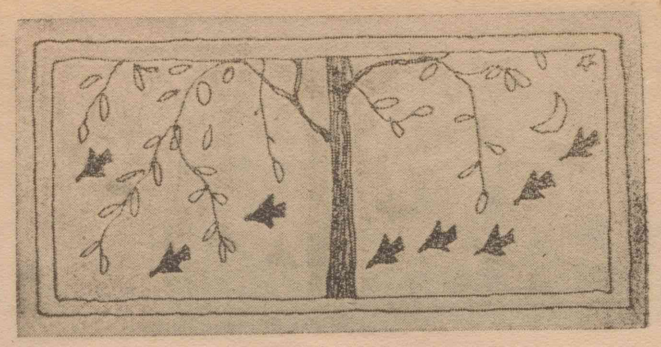
こゝかしこ、
さだめなく、
數あまた泳げり。
青空に
魚ら泳げり。
その魚ら、
心をもてり。



逕

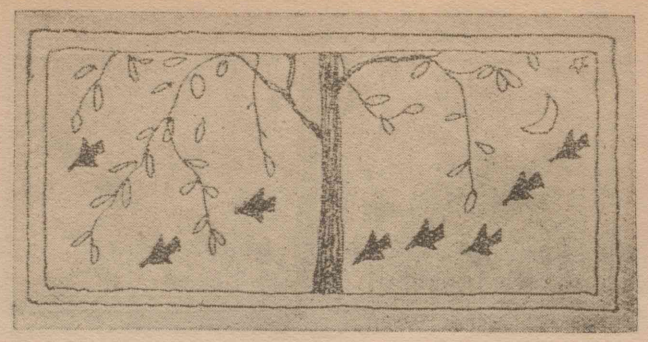
しろがねの壺に逕あり、
一すぢの紫を引く、
その逕をひたすら
空あほぎ盲者らいそげり。

逕は痛める神經にして
その上に雪、
その上の幻想ず
とこしへに掻き消わつ。



空あほぐ盲者らの
手に手に瓠をとりかはさむ。
しろがねの壺の沈默、

聖靈の緑玉は裂け、
束の間のかなしき遥は
めざめざる獸の瞳に入る。

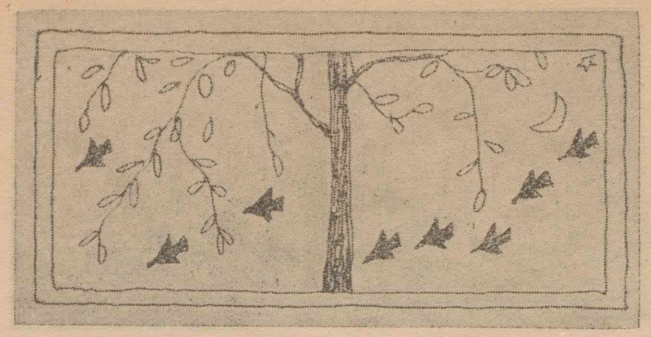


心

マリヤよ、
うらの畑の智慧の木は
空一ぱいの花をつけた。

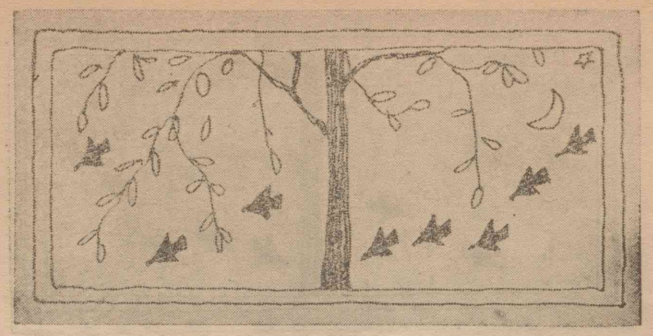
マリやよ、
花のかほりで眼が盲ひて
むかしの夢をて探る。

けふもけふとて光は霧のやうだ



りなたの髪のけも濡れて。

まひるだけれど月の聲、
何處であらう、わたしを呼ぶ。

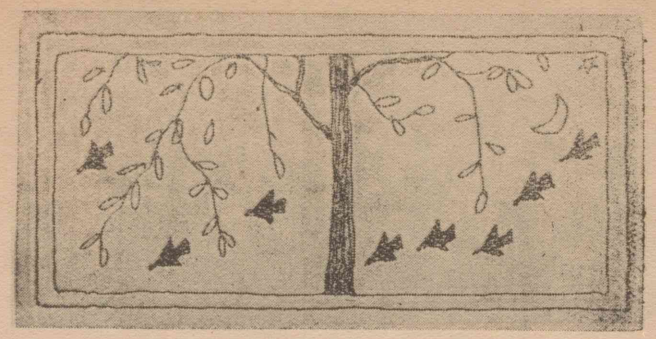


薔薇

薔薇には叡智がある
薔薇は空をまことの愛とし、
そして私には他の目がある。

かつて瞑ぢたことのない第三の目、
いやはての世界を作り、

音の中の光りに、いのちは
一切の影をゆめむ。



薔薇は聖なる三位一體。
どうぞ歸る選をおしねてください、
私には他の目がある。

消息

不可能を可能とするのである。

□

「詩作の傍、雜誌も作るといふ事は中々苦勞の多いものです」と三木氏は同情してくれた。ほんとにさうだ。其の上、自分には立派な普通以上の、眼にこそ見へないがそれだけまた過大な心靈的の職業がある。それはそれとして、兎に角、自分は戰ふ覺悟である。倒れるまで。

原稿は既に整理して印刷所へ廻した。若い文選が光線のあまりよく入らない二階の隅を彼方此方と眼を大きくしてうろつきながら譯の解らぬ唄で活字を拾つてゐるころであらう。街の本屋の店頭を第一ばんに飾りたい。

□

待ちに待つた諸氏の玉稿も來ないのが多かつた。中には二度までお願しても、自分のお願ひのしやうが惡いのか、返事すら頂けないのが二つや三つでなくあつた。鈴木三重吉氏のは御病氣で。高村氏や服部氏のはお忙しくて。川路氏は忘れてしまつたのかも知れない。

來月からは佛蘭西の島崎先生にもかいて戴ける事と思ふ。

□

何かにつけて田舍は不利だ。

□

この創刊號に大なる權威を與へられた寄稿家と大なる光を賜つた表紙畫の製作者、南薫造氏と多くの我が援助者諸氏とに感謝すべく、自分には適當な言葉が見つからぬ。

□

社友諸君よ。(自分は掲載した各自の創作に對する各自の感想が聽きたい)

□

かくて、生みの苦みは、今こそ、生みのよろこびである。

新詩研究社にて、四月十六日朝

寄贈新刊

桑の實　鈴木三重吉氏著　春陽堂發行
太陽の子　福士幸次郎氏著　洛陽堂發行
秋風の歌　若山牧水氏著　新聲社發行

詩歌　秀才文壇
創作　地平
現代詩文　潮流
南方の花　眞珠
潮　新文藝
ヒヤシンス　扉
茨城新論
福島新聞
秋田魁新聞
羽後新聞
其他

創刊號　毎月一回一日發行

壹冊定價金貳拾錢
本誌に關する一切の用件は新誌研究社宛の事
大正三年四月廿八日印刷
大正三年五月一日發行

發行人　福島縣平町字二丁目廿九番地　關內彥太郎
印刷者　福島縣平町字紺屋町廿五番地　根本吉太郎
印刷所　福島縣平町字紺屋町廿五番地　大正活版所
發行所　福島縣平町字二丁目廿九番地　清光堂
發賣所　東京市神田區表神保町　振替口座東京五三八八番　東京堂　振替口座東京二七〇番

（禁轉載）

編輯所　福島縣平町搔揶小路　新詩研究社

COSA BELLA
MORTAL PASSA
E NON D'ARTE

群馬県立図書館
0848399-2